
大正冒険奇譚 異伝

剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大正冒険奇譚 異伝

【Nコード】

N0789H

【作者名】

剣

【あらすじ】

時は大正。関東大震災の後のこと。冒険家であり、探偵でもある七尾祐介は活動拠点を帝都から古都・京都に移す。親友の行商人の湯田はもちろん、七尾を師匠と呼ぶ倉見春香を仲間に、七尾達は新たな怪事件に挑む。パワポケ7の大正編の続編にあたります。8以降のキャラも登場します。毎週土曜日更新予定。全10話予定。

第1話 鬼伝説（前書き）

パワポケ7 大正冒険奇譚編の続編となっています。
なお、自サイトでも公開中

```
> A href="" http://kenworldofsky.  
web.fc2.com/"<worldofsky>/A<
```

第1話 鬼伝説

汽車から見える景色は、走馬燈のように次々と現れては消え、流れていく。

時は大正。震災の後が生々しく残る帝都から古都・京都へと向かう汽車の中である。

世界を股にかける冒険家であり、探偵でもある七尾祐介は、ぼうつと徐々に闇に包まれつつある黄昏の空を眺めていた。

「どうしたでやんすか？ ぼうつとして……。七尾君らしくないでやんす」

「何でもないよ。湯田君」

そう言っではいるが、視線は外に向いている。上の空というやつである。

（まあ、これ以上何か言ったところでたいした返事は聞けないでやんしょうし……。しばらく放っておくでやんす）

湯田は七尾の横顔を一瞥すると、そつとため息をついた。

第1話 鬼伝説

「七尾君、着いたでやんすよ」

「ん、ああ。今日の宿はここか……」

二人が降り立ったのは小さな宿場町だった。辺りはすっかり暗くなっていた。ガス灯なんて洒落たものがあるわけもなく、夜の帳をあたりが覆い尽くしている。

「なあ、湯田君」

「どうしたでやんす？」

辺りを見回していた七尾がぼつりと変だと呟く。

「変？ どういう意味でやんす？」

「人の気配がなさ過ぎる」

七尾の言葉に湯田は首をかしげた。

「そうでやんすか？ もう夜も遅いし、こんなもんじゃないでやんしょうか？」

「いや……この村全体が異様な雰囲気をしている」

「よく気づかれましたね」

「な、何でやんすか！」

湯田と七尾が振り返ると、こんな田舎には似つかわしくない眼鏡をかけた壮年の男が立っていた。

「あなたは？」

「この村の村長を務めています糸井と言います」

「探偵の七尾です。こっちの彼が湯田」

湯田が頷く。糸井は二人を一瞥し

「今夜は遅い……私の屋敷に泊まっていかれませんか？」

「いえ、もうすでに宿は取っているのです」

「そうですか。それは残念です」

それではと二人にお辞儀をすると糸井は踵を返して立ち去っていった。七尾は糸井の後ろ姿をずっと睨んでいた。

「何者なんですかね、あの人」

「わからない。でもただ者ではないよ……」

七尾は湯田の方に振り返り、行こうと促した。

「あんた達、どこから来たんだい？」

宿屋のおばちゃんが少し不審そうな目で七尾を見てくる。

「帝都から汽車で」

「え、帝都からだって？ 確かあそこは大地震が起きたって聞いたよ」

おばちゃんが驚いた顔で尋ねてくる。七尾は静かに目を伏せ「そうですね……。今も復旧作業が進められています」

「そうなんだ。今日は珍しい日だね。あんたらの他にも客が泊まっている」

普段はほとんど誰も来ないのでおばちゃんが苦笑する。

「ところでつかぬ事を聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

おばちゃんの顔が少しこわばる。七尾はおばちゃんの様子を気にせず言葉を続ける。

「どうしてこの村は誰も外に出ようとしないのですか？」

「……そのことか」

おばちゃんはため息をつく。そして語り始めた。

昔、この村を大きな赤鬼が襲っていたそうだ。また鬼は強力な呪術を使っていた。あるとき、鬼は旅の侍と巫女によって封印された。しかし、最近、大地を揺るがすほどの鬼の叫び声があり、村人達も鬼を目撃した。幸い村人が襲われることはなかったが、村人達は鬼を恐れ家から出ないのだという。

「本当に鬼がいるんでやんすかね？」

あてがわれた部屋の布団の上に寝転がった湯田が机の上に向かう七尾に尋ねる。

「まさか……。本当の鬼では無いと思うよ」

七尾はうんと伸びをして、目をこする。そしてふと思い立ったかのように湯田の方を向く。

「どうしたでやんす」

「なあ、むこうで何か光ってないか」

七尾が窓の外を指さす。ぼやっとオレンジ色の光が目に入ってくる。

「お、鬼火でやんす」

湯田の声を無視して、七尾は考え始める。

「ちよつと七尾君。おーい、七尾君」

それでも反応がない。湯田は視線を外し、布団に横になった。やがて睡魔が彼を襲い、眠りの世界へと旅立たせていった。

翌日、七尾は湯田と共にあたりを散策することにした。あたりには人気はなく、恐ろしいほど静かだ。

「これで全部見て回ったでやんすよ」

七尾は頷くと、湯田に言った。鬼の正体を探りに行くと。

そして二人は山を登り始めた。

「ひえ〜、何で山登りをするんでやんすか」

「もちろん、鬼は山に住んでいるからに決まっているだろ？」

文句を呟く湯田に七尾は当然のように言う。

「それにしてもでやん……………これは？」

「これが昨日俺と湯田君が見た鬼火の正体さ」

七尾が視線を上にする。そこにはこんな辺鄙な村の里山にはふさわしくないガス灯が立っていた。

「これが鬼火の正体なら……………鬼は？」

「それは……………俺の勘が正しければ、鬼はあの中にいる」

ガス灯の奥にある洋風の屋敷を七尾は一瞥した。

「昨日の方ですね」

糸井は落ち着き払った表情で七尾達を見る。

「糸井さん」

「何でしょうか？」

七尾の視線を受け、糸井は眼鏡をくいつと上げる。

「あなたは鬼の正体についてご存じですね」

糸井は少し驚いたような表情を見せ、

「はい」

一言そう答えた。

「それは、あの屋敷にいる外国人ですね。違いますか？」

七尾の言葉に、糸井は口元を少し歪めた。

「流石ですね。こんな辺鄙な村まであなたの名前は届いていますよ、冒険家で探偵の七尾祐介さん」

湯田が驚いたような表情を浮かべる。

「鬼の正体についてはあなたのお察し通りです、七尾さん」

糸井は真剣な表情になり、七尾の方を一瞥する。

「実はあの別荘で名だたる名士の方々が会合を開かれておりまして、その中に英吉利や独逸の方も含まれています」

「あ、暗がりです外人を鬼に見間違えたんやんすね」

七尾がゆつくりと頷く。

「そういうことです」

「糸井さん、俺に頼みたいことがあるんですよ？」

七尾が尋ねる。糸井は満足そうに微笑む。

「はい、村人達を不安にさせないように、七尾さんに鬼を退治していただきたいのです」

「わかりました」

七尾は頷くと湯田に目配せをした。

汽車から見える景色は、すっかり夜の帳に覆われ、窓からは星が揺らめいて見える。

「さっぱり七尾君と糸井さんが何をしたかわからなかったでやんす」
湯田は目の前で本を読む七尾を見ながら呟いた。その声が聞こえたのか七尾が本から顔をあげ

「簡単なことだよ。俺が鬼を退治したことにするんだ。それを糸井さんが村に広める」

「それだけでやんすか」

「あの伝説を利用して貰ったよ。名もない旅人がかつての侍と同じように鬼を退治したと。会合も終わったし、鬼が現れることはもうない」

ぱたんと本を閉じる音がする。湯田は七尾を見た。その表情は憂いを帯びていた。

「ところであの糸井さんは本当に何者なんでやんすかね？」

「彼は一切俺達に自分をさらしていない。この閉じた本のようにね」
薄暗い汽車の明かりがじゅっと小さな音を立てる。どちらもそれ以来口を開かない。

七尾にも思うところはあろう。湯田は小さく欠伸をして目を閉じた。

汽車は夜闇を切り裂き、古都へと向かう。

第2話 幽霊屋敷(前書き)

自サイトでも連載中です。

<http://kenworldofsky.web.fc2.com/>

第2話 幽霊屋敷

ぴちゃん、ぴちゃんはどこからか水のしたたる音がする。薄暗いランプの光がゆらゆらと弱々しく揺れる。

体が震えているのは寒さのせいだ、恐怖で震えているのではない。そう自分に言い聞かせる。

「どこに行っちゃったんでやんすかね……。七尾君」

敢えて大きな声を出して気を紛らわせようとする。見つけたらいい文句を言ってみると呟き、湯田は屋敷の奥の方に進んでいく。「湿っぽくなってきたでやんす。しかし、どこまで続くんでやんすかね」

歩けども歩けども続くのは長い回廊。湯田は少し虚脱感を覚えていた。

「七尾君、いい加減に迎えに来てほしいでやんす……」

弱々しい声で呟く湯田。視線をふっと下げる。

刹那の風が吹いた。ランプの灯火が消え、あたりが薄暗い闇に覆われる。

「おのれ……。おのれ……」

どこからか呻き声が響いてくる。

「ぎゃあああああああああー！」

湯田は消えてしまったランプを放り投げて、逃げ出した。彼の絶叫が屋敷中に響いた。

「おお、ここが京都でやんすか。古の香りがするでやんす」

「湯田君、はしゃぎすぎ……」

あちこちを見て騒ぐ湯田に苦笑しつつ、七尾はあたりを見回す。

この後、新しく活動拠点となる事務所に向かう手はずとなっていた。そのため、とある人物と待ち合わせをしている。

「おお、舞妓さんでやんす。かわいいでやんす」

「ちよつと湯田君、静かにしろよ」

「七尾君にはあの良さが解らないでやんすか！」

「そういう問題じゃなくて……」

「あ、師匠」

呆れた表情をして反論をしようとする七尾の肩をぽんぽんと誰かが叩き、元気の良い声が耳元で響く。

「ん、春香ちゃん」

「お久しぶりです、師匠」

七尾は振り向き、自分の後ろにいる少女に声を掛ける。春香と呼ばれた少女はぺこりとお辞儀をする。

「七尾君、この娘誰でやんすか？」

湯田が訝しげに春香を見る。七尾は不思議そうな顔をして

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

「聞いてないでやんすよ。こんなかわいい娘と待ち合わせしていたなんて」

大きな声で叫ぶので近くにいた人が一斉に七尾達を見る。

「そついえば、言ってなかったかな」

「それに知り合いだなんて聞いたこともないでやんすよ？」

「え、そうだったっけ？」

七尾が首をかしげる。

「そつでやんす」

湯田が大きく頷く。

「……師匠、こんなところで話しているよりも、先に事務所の方に行きましようよ」

「そうだな。湯田君、後で話すよ」
春香の言葉に七尾は頷く。春香を道案内を頼み、七尾達は事務所へと向かった。

「おお、すごいでやんすね。前より広いでやんす」

目の当たりにした事務所を見て、湯田が興奮気に言う。

「うん、すごいね」

「さ、師匠も湯田さんも長旅でお疲れでしょうから、座ってください
い」

惚けた七尾に声を掛けて、二人をソファーに座らせる。

「おお、ありがとうでやんす」

春香が紅茶を入れてそれぞれの前に置く。

「すまないね、春香ちゃん」

「何言ってるんですか、師匠。気にしないでください」

カップに口を付けながら春香が微笑む。

「ところで七尾君は春香ちゃんとどうやって出会ったんでやんすか
？」

出された茶菓子を舌鼓を打ちながら、湯田が尋ねる。七尾は苦笑
して

「前に、俺一人で冒険に行ったことがあったよね」

「ああ、無一文なしになって衣服も剥がされかけたって言ったとき
でやんすね」

封印した記憶だったのだろう、七尾の表情が若干青ざめる。

「そのときに、たまたま事件の解決に協力して貰ったんだよ」

「へえ、そうだったんでやんすか」

「湯田さんのことは師匠から良く聞いてました。ゾンビの出る村で
置いてけぼりにされたとき半泣きになったとか……」

笑顔で言う春香の横で七尾の顔がもう一度青ざめていく。湯田の

瞳がきらりと光る。

「七尾君……」

「ところで、実はもう依頼を受けているんだ」

強烈な冷たい視線を湯田から感じた七尾は慌てて話題を変えた。

「もうそろそろ来るんじゃないかな」

「こんこんとノックをする音がする。春香が立ち上がり、扉を開ける。

「やあ、七尾君。久しぶりだね」

「あ、和桐会長……」

湯田が驚いたように声を上げる。

「お久しぶりです。依頼受けさせて貰います」

「そうかね。それはありがたい」

和桐会長は春香が運んできた紅茶を口にして喜んだ。

「で、どういう依頼なんでやんすか？ オイラ聞いてないでやんす」

「実はこの近くに別荘を持っているんだが、出るんだよ」

「出る？」

首をかしげる湯田。会長は頷いて

「そう、幽霊が」

「へ？」

「だから幽霊だって」

絶句する湯田に七尾が言う。

「あわ、あわわ、幽霊でやんすか……」

実は湯田、幽霊やゾンビと言った怖い物が大の苦手である。

「そろそろ時間だ。じゃあ、頼むよ」

固まった湯田を一瞥して会長が言う。七尾が頷くと、会長は事務所を出て行った。

「湯田君」

「……何でやんすか？」

「詩乃ちゃんに連絡はとれるかい？」

湯田は慌てて動き始めた。

「大きなお屋敷ですね」

「ほんまやな。うちの神社と比較ならへん大きさや」

春香の惚けた声に、巫女装束に古い刀を持った女性　蕪崎詩乃
は目を細め、同意する。

「わざわざ呼び出してごめんね、詩乃ちゃん」

「いいんよ、別に。どうせ神社の仕事も暇やし」

詩乃は笑顔で答える。彼女と七尾達は帝都にいた頃、神社に祀られていたアメノムラクモという剣を窃盗団から取り戻した時に知り合った仲だった。その後も七尾達の仕事をしばしば手伝っていた。

「師匠、幽霊退治なんてできるんですか？」

春香が不安そうに尋ねる。七尾はおもむろに古い包みに覆われた長い棒を取り出す。

「これは？」

「伝説の刀・鬼切だよ。鬼をも一刀両断にするといわれる刀で、霊力を含んでるから霊体にも効くんのだ」

「流石、師匠ですね」

尊敬のまなざしで春香が七尾を見る。湯田はどんよりとした空気を醸し出す屋敷を見て、怖じ気づいていた。

「七尾君、本当に行くんでやんすか……」

「もちろん。さ、そろそろ出発するぞ」

湯田の言葉に七尾は当然だとばかりに答える。そして屋敷に向かって歩き始める。

「あー、待ってくれでやんす」

どンドン先に進んでいく七尾達を湯田は慌てて追いかけた。

「ふーん、中は意外と普通ですね」

「そうだね」

前に行く七尾と春香、その後ろに湯田がいて、しんがりには詩乃が務めている。

「うー、怖いでやんす」

呟く湯田を見ながら、春香は七尾に尋ねる。

「湯田さん、大丈夫ですか」

「いつものことだから気にしなくて良いよ」

七尾はすました顔で言う。

「なあ」

今まで無口だった詩乃が口を開く。

「どうしたんだ、詩乃ちゃん？」

「何か来るで」

次の瞬間、突風が吹いたかと思うとついていたランプが全て消えた。

「うわあああああ！」

湯田がパニックを起こして走り出す。

「あ、待て、湯田君」

慌てて七尾が止めようとするが、湯田のスピードはすさまじくあつという間に姿が見えなくなってしまった。

「うちが追いかける」

詩乃が湯田が走り去っていった方向を一瞥する。七尾が頷くと詩乃も駆けだしていった。

「春香ちゃん、はぐれないようにね」

七尾は隣にいる春香に言った。春香はこくりと頷き、ランプを付ける。

「私たちも行きましょう、師匠」

「相変わらず廊下が続くな」

「いったいどこまで続いているんでしょうね」

鬼切をいつでも抜刀できるように構えた七尾の横顔を見ながら春香は呟く。

「ぎゃあああああああああ！」

大きな叫び声が七尾達の鼓膜を震わせる。

「今の声、湯田君だ」

七尾は春香の手を掴むと駆けだした。

パニック状態から落ち着いた湯田は、目の前に何かがいることに気がついた。

「おのれ……。おのれ……」

低い呻き声が湯田の腹から響いてくる。

「ひい」

「わしを粗末に扱いよって、許さぬ……」

ぼんやりと輪郭がはっきりとしてくる。湯田は後ずさった。

「まずは貴様からだ」

ぎろりと何かに睨まれ、湯田の体は鉛のように重くなった。

「う、な……。なんでやんす……か」

「未来永劫、この地でさまようが良い」

霊力の無い湯田にもはっきりと悪霊の姿が見えた。

「そうは……。させんで！」

淡い青い稲妻のような一閃。神刀・アメノムラクモに宿った詩乃の霊力だ。

「大丈夫か、湯田君」

すでに抜刀している七尾と後ろから後ろから春香がやってくる。

どっと体が軽くなり、湯田はその場にへたり込む。

「春香ちゃん、湯田君を頼む」

「わかりました」

湯田と春香を一瞥し、七尾は詩乃の隣に立つ。

「そろそろここから離れて貰うで」

詩乃がアメノムラクモを一閃させる。亡霊が呻き声を上げる。そこに七尾が鬼切を振るう。

「がああああああああ！」

亡霊の体が切断され、みるみる影が薄くなる。

「……………さま、の、御代……………。穢れた……………もの、たち……………きもの……………」

亡霊は何かを呟くと消滅した。

疲れているわけでもけがをしたわけでも無いのに、七尾の額にはいやな汗が流れていた。

「おお、屋敷の件を解決してくれたか」

事務所を訪れた和桐会長は手放しに喜んでた。

「……………はあ。何とか」

七尾は素直に喜べなかった。あれ以来気になることがあった。

(確証はないし。今は保留にしておくか)

「七尾君、ディナーでやんすよ。早くするでやんす」

「ああ、わかったよ。今行く」

会長に夕食を招待され、湯田は張り切っている。置いて行かれなように七尾は慌てて上着を羽織った。

第3話 徐福の秘薬（前書き）

自サイトでも公開中

http://kenworldofsky.web.fc2.com/

第3話 徐福の秘薬

「いい天気でやんすねえ。こういう日には……」

「貴様が湯田浩一だな」

朝日を受けて大きく伸びをする湯田の後頭部に冷たい感触が伝わる。どばっと嫌な汗が流れて、清々しげな表情は一瞬にして崩れ去った。

「だ、誰でやんすか」

「騒ぐな」

一瞬の逡巡、湯田は押し黙り、頷く。

「我が主の元に来てもらおう」

声と同時に、首筋に衝撃が走る。湯田の意識は一種にして闇へと落ちた。

第3話 徐福の秘薬

「師匠、大変です！ 起きてください」

春香が七尾が寝ている部屋に入ってくる。

「うーん、もうちょっと寝させて……むにゃ」

「ちょっと、師匠」

ゆさゆさと七尾の体を揺するが、全く起きる気配はない。春香はあの手この手を使って起こそうとするが、起きる気配がない。

「う、どうして起きないんですか」

春香は布団に潜り込む。そして七尾を布団の外へ出そうとする。

「師匠、重いですよ」

「えっ」

七尾の言葉に春香が驚きの声をあげる。

「日本でも大阪を拠点に活動しているらしいけど」

「その通りや。流石、冒険家の七尾祐介やな」

「誰だ」

七尾が瞬時に春香をかばいながら振り返る。

「そない警戒せんでもええよ」

そこにいたのはやたらと背の高い女だった。七尾は息を呑む。

「ヤシヤヤ、あんたらを主の元に案内する役目になったんや」

「湯田君はどうした」

七尾はヤシヤを見据える。

「さあ、無事なんは確かやけど、連れ去った奴が無骨な奴やからなあ」

ヤシヤの言葉に七尾は表情こそ崩さないが内心でほっとしていた。

「こんなところで立ち話もあれや。あたしについてき」

七尾と春香は互いに顔を見合わせ、頷いた。

七尾達が連れてこられたのは歓楽街だった。酒のにおいや男達の下品な笑い声、それに女の嬌声。

「ここ……気分が悪いです」

春香が不快感を露わにする。七尾はそつと春香の手を握り、そばに寄せる。

「大丈夫、心配しないで」

七尾がそつと笑いかける。少し安心したのか頷く春香。

「お二人さん、仲ええなあ。もしかして出来てるん？」

「は、はい？」

ヤシヤのからかうような声に戸惑う春香。

「師匠と弟子の関係だ……」

こめかみを押さえながら七尾が言う。ヤシヤは真っ赤になる春香を一瞥し

「ま、そういうことにしとくわ」

「遅いぞ」

和やかな雰囲気を一瞬で消し去る冷たい男の声。ヤシヤの気配が変わる。

「ラセツ」

鋭い目をした男、ラセツをにらみつけるヤシヤ。

「七尾祐介」

無表情に男が七尾の名を呼ぶ。七尾は油断無くラセツに視線を向ける。後ろでは春香がごくりと息を飲む気配がする。

「我が主が貴様をお呼びだ。ついてこい」

七尾は無言で頷く。ヤシヤは殺気の籠もった目でラセツを睨んでいる。

「行こう、春香ちゃん」

春香を促し、七尾はラセツの後に続いた。

「ラセツです、七尾祐介を連れて参りました」
「入れ」

ラセツの声に重たそうな扉がゆっくりと開く。ラセツに促され、前に進む七尾。

「ふおっふおっふお。貴様が七尾祐介か」

奥から白い髭を伸ばした老人が側近の男を伴い現れる。

「そうです」

七尾は老人を油断することなく睨み付ける。

「単刀直入に聞く。あんたらの用件はなんだ？ 湯田君を誘拐するのは、俺に無理矢理何かを頼もうとするからだろ」

「ボスになんて口を……」

側近の男が七尾を睨み付けてくる。しかし老人は愉快そうに笑い
「七尾とやら、その通りじゃ。ワシの願いは不老不死、徐福の秘薬
じゃ」

「徐福の秘薬、何ですかそれは？」

「今まで黙っていた春香が口を挟む。」

「そちらのお嬢さんは何者じゃ」

「倉見春香です。七尾祐介の弟子です」

春香が答える。老人は面白そうに笑い

「そうかそうか。春香とやら、徐福とはかつて秦の始皇帝に不老不死の薬を手に入れると言った者じゃ」

「徐福は不老不死の薬を求めて東に旅立った。そして戻ってこなかった」

七尾が春香に伝える。

「それって……」

「ああ、かぐや姫でもそうだけど富士山には不老不死の薬があるって言われている」

「ふむ、確かにその通りじゃ。じゃが、徐福は日本からさらに東へ向かったらしい」

「それで？」

「南のとある島で謎の古代遺跡がある。我が一族の古文書と一致する」

「そこに徐福が秘薬を隠したと」

「いかにも」

七尾の言葉に頷く老人。

「七尾祐介、徐福の秘薬を取ってきてもらいたい、この王大人の唯一の願いじゃ」

「わかりました」

七尾が王大人を見据える。

「し、師匠」

「湯田君は無事なんですか？」

「それは心配ない。客として丁重に扱っておる」
側近の男が答える。

「おお、七尾君でやんす。赤龍最高でやんす」
両手に美女をはべらし、豪勢な料理に舌鼓打つ湯田。はあっとた
め息をつく七尾。

「湯田さ〜ん、心配したんですよ〜」

春香が湯田の元へ行き、怒ったような表情をする。そんな二人を
一瞥して七尾は再び王大人と向き合う。

「さて、古代遺跡は危険と聞く。ラセツ、ヤシヤ〜!
すぐにラセツとヤシヤが頭を垂れる。

「この者達はワシの部下の中でも最高の手練れじゃ。どちらか片方
をお前達の護衛に付けよう」

(お目付役か……)

「……ラセツだ」

「ヤシヤや。さつき顔あわしたから知つとるよな」

七尾は二人を一瞥する。

「……ヤシヤ頼む」

「はははっ、おおきに。七尾君、今後はよろしゅうな」

「ああ」

「ふおっふおっふお、決まりじゃな」

それから簡単な説明を受けて、七尾達は帰された。

「ここか」

あれから5日後、七尾達はジャングルが鬱そうと生い茂る絶海の
孤島に降り立った。

「そうや。この奥にあるって聞いている」

槍を携えたヤシヤが答える。

「村上、わざわざこんなところまで連れてきて悪かったな」

「気にするな。わしも今まで暇やったからな」
「けらけらと笑う村上。」

「師匠、そろそろ行きましようよ」
「春香が七尾を促す。七尾も頷き、湯田と目配せする。」
「出発だ」

「いったいこのジャングル、どこまで続くんでやんすか、もう嫌でやんす」

「うっさいなあ、みんな我慢してんねんで」
「ヤシャがいらいらした声で返す。」

「のっぽ女がうるさいでやんす……」
湯田の声にヤシャの顔つきが変わる。そして素早くのど元に槍を突きつける。

「あたしはのっぽな女やなくてスレンダーな美女や。そこんところ間違えないように」

殺気の込められたヤシャの視線にあてられて湯田は頷くしかかなかつた。

「師匠、あれ、放っておいていいんですか？」

春香がちらりと後ろを覗きながら尋ねる。七尾はすました顔のまま「自業自得だから放っておこう」

春香はその言葉に頷いた。

「ん、気配がかわったな」
村上が目を細める。七尾も頷く。

「どうやらここがゴールみたいやな」
ヤシャが巨大な遺跡群に目を見開く。

「この遺跡、嫌な感じがします」
春香が少し不安げに遺跡を見る。

「空気がどんよりしてる気がするでやんすね」

湯田も同意する。

七尾はすでに先に進み、遺跡の中を色々と調べている。

「神殿みたいだな」

「神殿やて？」

じつと壁画に描かれた文字を見る七尾の言葉にヤシャが反応する。

「ああ、太陽神を祀る神殿だ。この文字は」

ヤシャは壁画を見るが、意味不明な記号の羅列に頭が痛くなる。

「あたしには向いてないわ。こういうところ」

「師匠、こっちに祭壇らしきものがあります」

「わかった、すぐ行く」

春香の声に応え、七尾が立ち上がる。

「ヤシャ、行くぞ」

「ん、ああ、わかったわ」

七尾の後にヤシャは続いた。

「これは……」

祭壇の周りには深い堀が掘られていた。底は真っ暗で何も見えな
い。

「がちやり、どこかで音がする。」

「おい、橋が……」

さつき七尾達が渡ってきた祭壇と外をつなぐ橋が離れていく。

「それだけやない、何か来るで」

ヤシャの声に一同が身構え、それぞれの獲物を構える。

「ずいぶんでかいトカゲやな」

ヤシャの声が祭壇に響く。七尾もそれに頷く。

全長約5mという驚異的な大きさのトカゲが祭壇の中心部にいる。

「もしかして生け贄の祭壇」

春香の顔が青ざめる。

「生き残ることを第一優先に戦え、春香ちゃん」

「は、はい」

七尾が春香を叱咤する。春香は気を持ち直し、ブラウニング構える。

「ヤシャ、村上。トカゲの陽動を頼む」

「了解や」

「おう」

ヤシャが鋭く突きを入れ、村上は的確にトカゲの急所を打ち据える。

「春香ちゃんは二人の援護、それと湯田君、ありっただけ爆弾を」

「はい」

「了解でやんす」

七尾は湯田の元に駆け寄ると次々と爆弾を放り投げる。

「ヤシャ、下がれ！」

幾つもの爆弾が炸裂する。さらに七尾はトカゲのいる床に爆弾を置く。

「村上も下がってくれ。春香ちゃん、そのまま爆弾を打ち据えるんだ」

「は、はい、師匠」

春香が爆弾を撃っていく。その間、七尾はトカゲの動きを止めるべく、散弾銃を放つ。

ばきんつと床が崩れ、トカゲの下半身が宙に浮く。

「ヤシャ、右足を貫け」

「わかった、任せとき」

素早くヤシャが床にかろうじてついているトカゲの右前足を貫く。

「くらえ」
さらに左前足を七尾が鬼切で切り裂く。だが途中で止まってしま

「危ない、師匠」

春香が七尾に噛みつきこうとしたトカゲの脳天を打ち抜く。悲鳴を

上げるトカゲ。

「落ちろ！」

村上の岩をも砕く拳がトカゲの腹に打ち据えられ、巨体が後ろに下がる。そして力なく落ちる。

巨体を振るわせる絶叫が祭壇中に響き渡る。そして静かになった。

「はあはあ、助かった」

春香がその場に座り込む。

「ふう、ほんま危なかったな」

ヤシヤも槍を床に突き刺し、支えにして座り込む。

「七尾君、大丈夫でやんすか」

「ああ、少し休もう」

湯田の出した回復薬を飲みながら、七尾はふうつとため息をついた。

「さ、あたしは先に薬を探しに行くわ」

ヤシヤが立ち上がる。七尾は驚いたような顔をする。

「何けつたいな顔してるん。当たり前やん」

「その必要はない」

銃声が一つ。

「やつぱり来よったか。ラセツ」

ヤシヤが槍を構える。その表情はかつて無いほど険しい。

「あんたがここにおるって事はボスが死んだんやろ。まあ、あんたが殺したんやろうけど」

ヤシヤの声にもラセツは顔色一つ変えない。

「七尾君、先行き。こいつはあたしが殺る」

ヤシヤの決意の表情を見た七尾は頷く。そして素早く銃を抜き、ラセツの銃を打ち据える。

ヤシヤの顔が驚きに変わる。

「生き残れよ」

七尾はそれだけ言うと春香と湯田と村上を連れて走り出した。

「ほんま変わった奴やで……」

「……………あの男に惚れたか」
ラセツは表情を変えずに呟く。ヤシヤは目を閉じ、構える。
「あんたとあたし、どっちが上か、決めようやないの」
二つの風が動いた。

祭壇の奥にある入り組んだ迷路を抜けた先にある小さな小部屋、
七尾達はそこにいた。

「ありました、秘薬が」

春香が小さな葉っぱを見つける。

「それ……もしかして」

「麻薬の一種でやんすね」

小さな本を取り出した湯田が七尾の言葉に続ける。

「これを服用したときに、強力な幻覚作用と催眠作用があるみたい
でやんす」

「服用したときにこれで不老不死になっただって思ったら……」

七尾が目を見開く。

「暗示がかかるでやんすね。あ、それとこれを大量に服用したらす
ぐに死ぬみたいでやんすよ」

「そうか。確かにそう考えると不老不死の薬が出来るな」

不老不死になったと錯覚したまま眠るように死ぬ。これが不老不
死の秘薬の真実だった。

「詐欺でやんすけどね」

「世の中そんなものさ」

湯田の言葉に七尾は苦笑いを返した。

「師匠、どうします？」

「とりあえず持って帰ろう」

七尾の言葉に春香は頷いた。

「み、ごと……だ」

刀を手放し、ラセツが地に伏せる。そしてそのまま動かなくなつた。

「は、はあ、何とか、倒したで」

ヤシヤは槍を杖代わりにしてかろうじて立っていた。彼女の体には無数の傷があり、とめどなく血が溢れている。

「くそ、目が霞んできよつた」

自嘲気に笑う。七尾の姿が見える、そんな気がした。

「安静にしていれば大丈夫です」

「そうでやんすか。ありがとうでやんす」

どこからか声がある。少しうつつしいけど、暖かい声だ。ヤシヤはそう感じた。

もう一眠りしよう、そうすればいいことがある、そんなことを思った。

「あ、あたしは……」

「目醒めました？」

春香が優しく微笑む。その笑顔をまぶしくヤシヤは感じた。

「あ、うん。どれくらい寝とつたん？」

「丸3日ほどです。大丈夫ですか、体は」

春香が心配そうに尋ねる。ヤシヤは自分の体がやたら鈍っているように感じる以外に何もなことを伝えた。春香はほっと安堵の息をついた。

「大丈夫か」

七尾が部屋に入ってきて、尋ねる。おかげさんで、とヤシヤは答える。

「赤龍は日本から撤退したみたいだ。知り合いの情報屋に聞いたところ」

「そう……………か」

ヤシヤは下を向き、沈黙する。

「あ、のっぽの女がセンチになってるでやんす。これは珍しいでやんす。明日は雪が降るでやんすよ」

湯田が部屋に入って来るなり、騒いだ。

「おい、眼鏡。あたしはのっぽな女やなくてスレンダーな美女や。そこんどこ間違えたら痛い目にあうで」

ヤシヤはぎろりと睨む。

「それでこそこのっぽの女でやんすよ」

そう言って湯田は笑った。つられて、七尾と春香も笑い出す。

「確かにらしくないなあ」

ヤシヤも笑い出す。

「なあ、七尾君」

「なんだ？」

「あたしも仲間に入れてくれへん。居場所もないし、それに……………こんな美女をほっとくのはあかんやろ？」

ヤシヤの言葉に今度は七尾は暖かく微笑む。

「決まってるだろ、もう仲間なんだから」

七尾の言葉にヤシヤは本物の笑顔で笑えた、そんな気がした。

第4話 魔封じ

ここはどこだろうか、俺は誰だろうか。

わからない……。ただ、目の前には生活感のない寂れた村が存在するのみ。

寂しい 心の奥がちくりと痛む。

どこかで子供の泣く声がする。

どこだろう。俺は歩き出す。

無残に崩れた家屋や納屋、それら全てが俺の心を抉る。

無性に頭が痛い。何かが直接頭の中に響いてくる。

俺は呻き声を上げた。呼吸が荒い。

荒い息のまま俺は顔を上げる。

「っ！」

目の前に母親にすぎる小さな子供が見える。ずきりと俺の中の何かが疼く。

子供は俺には気づかず、ただ母親にすぎり泣き叫ぶだけ。

何かが思い出せそうな気がする。俺は頭を抱える。

だが、霧に覆われたように頭の中はただ真っ白になるだけ。

それでもこの霧の奥に何かがある。確信があった……。

第4話 魔封じ

「師匠、舞妓さんですよ。凄いですね」

「でやししょう？ やっはり春香ちゃんの違いがわかる娘でやし」
春香と湯田にはさまれ、七尾は辟易としていた。確かに舞妓さん

にある種の魅力があるのは認めるが、なぜそこまで騒ぐのか七尾には解らなかった。

「目的を忘れるなよ、二人とも。今日は何をしに来たか覚えてるか？」

「えっとなんでやんしたっけ？」

「確か師匠の知り合いに会っただけだよ」

「そうだよ」

湯田に呆れつつ、七尾は春香の言葉に頷く。

「ああ、ようこさんでやんすね」

「うん」

ぼんと湯田が手を叩く。

「で、そのようこさんってどんな人なんですか？」

春香が興味津々と言った表情で訊ねてくる。

「優しそうな美人でやんす」

「昔京都一の芸者さんだった人だよ。まあ、百聞は一見にしかず。実際に会ってみないと」

七尾はそう言って、小さな店の前で足を止めた。

「ここでやんすね」

「うん」

春香と湯田を伴って七尾は店に入る。落ち着いた感じの和菓子屋だ。

「来たね」

「貴田」

高価な服に身を包んだ青年にむかって七尾は片手を上げる。

「あら、七尾さん」

「ご無沙汰してます、ようこさん」

鮮やかな着物に身を包んだ妙齡の婦人がにっこりと七尾にむかって微笑む。

「おひさしぶりでやんす」

「湯田さんも元気そうね」

「えっと、はじめまして……」

春香が少し緊張した面持ちで頭を下げる。

「七尾さん、この娘は？」

「俺の弟子の……」

「倉見春香です」

「あらそうなの。よろしくね、春香ちゃん」

ようこが誰をも魅了する優しい笑みを浮かべる。春香はぽつと惚けるが、すぐにぺこりと頭を下げた。

「えっと今日来て貰ったのは私の友達が困っているからなの」

ようこが話を切り出す。

「その人は名家の娘さんでね。僕とも面識があるんだ」

「私が七尾さんのことを話したら、是非会ってみたいって言われてね」

ようこの言葉に貴田も相づちを打つ。どうやら貴田にも同じことを言ったらしい。

「それでここに彼女を呼んだんですよね？」

七尾の言葉にようここと貴田が目を見開く。

「何でわかったの？」

「何となくです」

七尾は苦笑した。

「静耶、入ってきて良いわよ」

ようこが隣のふすまに声を掛ける。ふすまが開いて隣の部屋から小柄な少女がやってくる。

「おお、かわいいでやんす」

「ちよっと湯田君、黙ってる」

「そなたが七尾か？」

静耶と呼ばれた少女は七尾をしげしげと見ながら訊ねる。

「はい」

「そんな居住まいを正さんでも良い。私のことはシズヤと呼んでくれ」

「わかった」

「ところでその眼鏡と……」

「ああ、この二人？」

「七尾君の友達で行商人をしている湯田でやんす」

「七尾の弟子の倉見春香です」

二人の言葉にシズヤは納得したように頷く。

「七尾、そなたには我が一族に伝わるランプをどうにかしてもらいたい」

シズヤが真剣な表情で口を開く。

「え、ランプが奪われたから取り返せじゃなくて？」

湯田が不思議そうにする。シズヤは首を横に振り

「我が一族には江戸時代に西洋より伝わったとされる古いランプがある」

「ランプ……ですか？」

「そうなのだ。そのランプはなぜかいくら捨てようとしても手元にかえってき、持ち主を不幸にするのだ」

「厄介な代物でやんすね」

「ああ、そうだな」

湯田の言葉に七尾は頷き返す。

「そういうわけであなたを呼んだのよ」

とようこ。貴田もそれに同意する。

「わかりました。何とかしてみます」

「そうか。それはありがたい」

シズヤは少し嬉しそうに微笑んだ。

「七尾、私は暇ではないのだぞ。もしつまらないことだったら切るぞ」

男物の衣服に身を包んだ女性・埼玉珠子は不機嫌そうに七尾を見

た。七尾は少し焦ったような表情をする。

「でも異様な雰囲気があるで」

珠子と同様に七尾に呼ばれて来た詩乃が眉をひそめて、屋敷の方を伺う。

「確かに」

珠子も二つの日本刀を取り出す。

「そなたたちを待っていたぞ」

シズヤがこちらにやってくる。

「シズヤ、ランプはどこに？」

「あの倉の中じゃ」

シズヤを案内に七尾達は広い屋敷の中を進んでゆく。

「大きな屋敷でやんすね」

「それはそうだ。京都の名家の一つだからな」

湯田の感想に珠子が答える。

「ここか」

「予想以上やな。これは骨が折れそうやわ……」

詩乃がアメノムラクモを取り出す。

「ランプを持ってくる。私しか触れないのでな」

シズヤの言葉に七尾は頷く。

シズヤは暗い倉に入るとそこそと中を漁る。そしてしばらくして

「あつたぞ」

と喋って倉から出てくる。

「こんなぼろつちいランプがでやんすか？」

「こつんと湯田がランプを叩く。」

「あ、あかん！」

詩乃があわてて湯田を制止しようとするが、すでに遅くランプからもくもくと黒い煙が上がる。

「む」

珠子が黒い煙を刮目する。

「な、何だ。この者は」

「え、何にも見えないでやんすよ？」

シズヤがおびえたように宙を指さす。

「二人とも下がれ」

珠子が二つの刀を抜刀し、シズヤの前に立つ。

「姿を現せ」

珠子は宙を睨みながら呟く。

「久々に出てきたと思っただら物騒でマジン」

奇妙な衣装に身を包んだ恰幅の良い男が姿を現す。

「貴様、この国のモノではないな」

珠子が二つの刀を構える。

「それでマジン」

「こやつ、何のようじゃ」

シズヤが男を睨む。

「せつかくご主人様の願いを叶えようとしたのに、それはひどいでマジン」

「えっ……………」

シズヤが虚を突かれたような顔をする。

「騙されるな。こいつはかつて他国から渡ってきた邪神の仲間だ」

「ほう、なぜそれを知ってるでマジン？」

「俺は諸外国を渡り歩いたこともある冒険家だ」

男が七尾を興味深そうに見つめる。

「なるほど、あの方の……………」

「否定はしないようなら、封印させてもらうで」

詩乃が魔封札を手に出現させる。

「おもしろいでマジン。このジンの力、見せてやるでマジン」

男　ジンは両手をかざす。火の玉が生成され、シズヤめがけて放たれる。

「させるか」

珠子が驚異的な身体能力でシズヤを抱え、火の玉を回避する。

「春香ちゃん、これを使い」

七尾はポケットから銃を取り出すと春香に手早く渡し、自らは鬼切を持って駆け出す。

「無駄でマジン」

ジンが七尾に手をかざす。急に体が重くなり、七尾の動きが鈍くなる。

「く」

ジンの屈強な腕が振るわれる。詩乃がアメノムラクモで受け止める。

「やるでマジン。でもこれはどうでマジン？」

ジンの体が見るみるうちに巨大化する。啞然とする湯田と春香。

「雷神剣、轟け！」

珠子が右手に持った刀を振り上げる。空の遙か彼方から一筋の雷光が煌めく。そしてジンを襲う。

「食らえや、とっておきの魔封札！」

詩乃がジンの体に強力な札を貼る。苦しみ呻くジン。

「湯田さん、爆弾を大量に」

「わかってるでやんす」

湯田がジンのまわりに爆弾を放つ。そこに春香が対霊体用の弾丸を放ち、爆弾に引火させる。

「うっ、まさかこれほどまでとは」

ジンが苦しげに呻く。

「だが、これは防げないでマジン！」

屋敷一つを丸呑みにするほどの巨大な火球がジンの頭上に出現する。これを食らえば一溜まりもないだろう。

「封印する」

七尾が鬼切を構え、ジンに向かって言い放つ。

「出来るでマジンか？」

ジンの言葉を無視して七尾が駆け出す。

「私のありったけの霊力。この魔封札にいれたで」

詩乃が片膝をつきながら呟く。

「ふむ。不可能ではない」

珠子が再び雷神剣を振るい、ジンの動きを一瞬止める。

「響け、風神剣」

七尾を高く吹き飛ばす。

「くらえ」

ジンの顔の前に飛んだ七尾は勢いよく魔封札を貼り付けた鬼切をジンに投げつける。

ぐさりと額に突き刺さる鬼切。

「ぐ、こんなはずじゃ……」

ジンは勢いよくシズヤの持っていたランプに吸い込まれていった。そしてランプのふたにはきつく詩乃の魔封札が貼られ、ジンを封じた。

「はあはあ」

地面に降り立った七尾は嫌な汗を拭った。

「大丈夫ですか、師匠」

慌てて春香が駆け寄る。七尾は荒い呼吸をなんとか落ち着かせ頷く。

「うん、もう大丈夫だ」

七尾はすつと立ち上がり、疲れた表情の詩乃をねぎらう。珠子は詩乃に肩を貸し、立ち上がらせる。

「事件、解決でやんす」

湯田は疲れたように呟いた。

「この度は本当に助かった。魔人を封じてくれて礼を言う」

後日、シズヤは深々と頭を下げた。

「ところであの魔人は何だったんでやんしょうね？」

「あれは、人の願いを叶える精霊だったものだよ」

湯田の言葉に七尾が呟く。

「願いを叶える？」

「ああ。だけど長い年月を経たうちにその存在が、人間を害するものになってしまったんだろ？」

「なるほど、だから願いを叶えるか……」

シズヤは目を伏せた。

「詩乃ちゃんの話によると100年くらいは封印は持つらしいよ」

「そうか。ならば我が一族が責任を持って安置しておこう」

「うん」

シズヤの言葉に七尾はそれがいいと頷いた。

「じゃあ、俺らはこれで」

「ありがとう。色々すまなかった」

「いや、これくらい何でもないよ」

七尾はシズヤに手を振ると、春香と湯田をつれてその場を後にした。

第5話 私の時間（前書き）

土曜日に更新できず、申し訳ありません。
後、今回は三人称ではなく、春香視点です。

第5話 私の時間

その日は気持ち悪いくらいに暑い日でした。

それにも関わらず、いつもは澄んでいるはずの蒼天の空はどこか憂いを帯びているように見えます。

私たちの命を輝かせ、生の営みを照らす太陽もいつもより弱く頼りなく感じます。

些細なことかもしれません。取るに足りないことかもしれません。それでも……。

古の京の人々をじっと見渡します。人々は無邪気に笑い、自らを憂い、生を謳歌しているように見えます。

私は恐怖を覚えました。

何かが起きる 確信めいたものが心の隅を駆け抜けました。

それでも私は祈ります。

それが杞憂であることを。何も起こらないことを。

運命の齒車は静かに動き出していました。

第5話 私の時間

探偵の弟子兼助手である私の朝は早い。

起きてすぐに身支度を整え、事務所に向かいます。

「おはようでやんす」

「おはようございます、湯田さん」

帳簿と睨めっこをしていた湯田さんが、こちらに気づき顔を上げます。湯田さんもちかかなりの早起きです。以前理由を聞いたところ、

回復薬や爆弾の調達が出来ていないのに、師匠が勝手に出発したため、ひどい目に遭ったそうです。それ以降、師匠が起きてくる前にあらかじめ準備をしているのだそうです。

私は再び帳簿と睨めっこし始めた湯田さんの側から離れ、事務所の掃除を始めます。

カーテンを開き、心地の良い朝日を部屋に入れ込む。そして窓を開き、空気を入れ換えます。

「はあ、良い天気。今日も暑くなりそうです」
新鮮な空気を胸にいっぱい吸いこむ。

「さ、掃除。掃除」
箒と雑巾を手に私は掃除を始めました。

掃除を終えた私は、師匠を起こしに行きます。師匠は寝起きが悪く、湯田さんは起こすのは無理だと言っていました。なぜか私が行くと師匠は起きてくれます。その理由を本人に聞いたら、間違いを犯してはいけなからとまじめな顔をして言われました。何のことかさっぱりわかりません。

事務所を出た私の耳にびゅんつと空気を切り裂く音が入って来ます。事務所の裏に回り、槍を構えて、汗を流す女性に声を掛けます。

「おはようございます、ヤシャさん」
私の声に、背の高いスレンダー女性　ヤシャさんは槍を止めました。

「ん、春香ちゃんやん。おはようさん」
ヤシャさんが片手を挙げて人の良さそうな笑みを浮かべます。

「春香ちゃんも朝早くから大変やなあ」
「そんな。ヤシャさんこそ朝からトレーニングしてるじゃないですか」

「ん、あたしのこれは習慣やからな」

そう言ってくるりと槍を回転させ地面に突き刺すヤシャさん。やはり槍の名手です。

「今から師匠を起こして、朝ご飯にするんですけど、ヤシャさんもどうです?」

私の言葉に少しヤシャさんはうらやましそうな顔をします。ですが、すぐにうーんとスレンダーな体を伸ばして

「うーん、じゃあ。いただくわ」

ヤシャさんの言葉に頷いた私は、師匠を起こすべく小さな借家に向かいます。

鍵を開け中に入ると珍しく師匠は起きていました。小さなデスクに向かつて何かを読んでいるようです。

「師匠」

「ん、春香ちゃんか……」

小さな封筒を懐にしまい込んで師匠が、こちらを見ます。その表情はどこか憂鬱げにも見えません。

「……何かあったんですか?」

「いや、何もないよ」

師匠は微笑んで立ち上がります。

「さ、事務所に行くか」

師匠の言葉に私は頷きました。どこか憂いを帯びたその瞳を横目に。

朝食を終えて、少しして師匠はいつものように事務所を開けます。ヤシャさんは朝食を食べ終わるとすぐに出て行ってしまいました。組織が崩壊した後、ヤシャさんは師匠の密偵をしているそうです。今日もその任務なのでしょう。

ヤシャさんが出て行った後、湯田さんと師匠は何やら話を始めます。話の途中から湯田さんの顔色が悪くなってきました。

大丈夫かと尋ねると、大丈夫でやんすと沈んだ表情で返されました。師匠も同じようです。

しばらく依頼もなく暇をもてあましていました。師匠も同じよう
で分厚い本を読んでいます。

「暇ですね」

本に集中しているのか師匠からは返事は返ってきません。

「もう……」

私が師匠に向かおうとした時、ドアが開きました。

「おい、祐介。生きてるか？」

「ずかすかと野暮つたい格好をした男の人が入って来ます。

「親父……」

師匠は呆れたような表情で男の人を見ます。

「つれないな。せつかく父親が会いに来てやったのに」

「借金残して息子に肩代わりさせた奴がどうどうと親のツラするな
よ」

師匠の言葉にぐっとわざとらしく男の人が心臓を押さえます。

「な、なんて奴だ。血も情もないのか」

「あんたに言われたくない」

師匠は冷たい目で男の人を見ます。

「しかし立派になったな、お前も。こんなかわいい娘までゲットし
やがって」

男の人は懲りずに師匠に言います。そしてちらつとこつちを見て
ウインクします。

「あの娘は俺の弟子」

「な、何、それは聞き捨てならんな」

「むしろあんたの行動こそ聞き捨てならないよ」

もう師匠は疲れたような表情で返します。

「しかし、弟子と言えは、何でもしてもらえないじゃないか！ あん
なことやこんなことも」

「そんなのするのはお前がどっかの女にしてもらっただけだろ」

「ぐっ、俺は母さん一筋だぞ」

「嘘付け」

「まあいい。今日はまじめな話をしに来た」

師匠のお父さんは真剣な表情になります。

「金は貸さんし、借金も肩代わりしないからな」

師匠の言葉に打ちひしがれるお父さん。すぐに持ち直し

「ああ、自己紹介がまだだったな、お嬢ちゃん。俺は布具里。こいつの父親だ」

「実態は女好きの借金ばつかりのダメ男だ」

二ヒルに決めた布具里さんの横で師匠が呆れながら付け足します。

「倉見春香です。よろしくお願いします」

「春香ちゃんか」

布具里さんにはやりと師匠の方を見て笑います。

「親父、今日は何のようだよ？」

「実はな。堤と南米の方に行くことになった」

布具里さんの言葉に師匠は目を丸くします。

「もしかして、あの遺跡か？」

「確証は無いがな」

「じゃあ、俺も」

師匠が興奮したように立ち上がります。

「ちよっと待て、祐介」

布具里さんも立ち上がります。そして師匠の腕を掴みます。

「……………大事な話がある」

険しい表情で布具里さんが呟きます。師匠は私に二人で話すと言つて、奥の部屋に行つてしまいました。

私は師匠の後ろ姿を呆然と見送るだけしかできませんでした。

「あの二人の長話はいつものことでやんすから」

湯田さんはずっと紅茶を飲みます。私は湯田さんと一緒にお茶を飲んでいました。

「そうなんですか？」

「そうでやんすよ。七尾君が10000円(当時の1円=現在の5000円)の借金を肩代わりさせられたときも長話していたでやんすね」

「え、10000円ですか」

「そうでやんす。まったくあの時は苦勞したでやんす」

湯田さんが当時を思い出しかぶうつとため息をつきます。

「そういえば湯田さんと師匠はどうやって出会ったんですか？」

ふと気になつてた質問を湯田さんに尋ねます。

「七尾君とでやんすか？ オイラがまだ駆け出しの行商人だった頃でやんす」

湯田さんは懐かしそうに話し始めます。私は湯田さんの言葉に耳を傾けました。

「オイラはまだ別の人と行商を行っていたんでやんすが、ある日突然、大きな獣の群れに襲われたんでやんす」

「獣ですか？」

「そう。ジャングルでやんしたからね。そこに七尾君達冒険家の一団が助けてくれたんでやんすよ。まあ、それから色々あって一緒に行動するようになったんでやんすけどね」

「へえ、知らなかったです」

「七尾君は昔のことを話すのがあまり好きじゃないみたいでやんすからね」

湯田さんは残った紅茶を一気に飲み干しました。そして二人が出てきたことを伝えてくれました。

布具里さんは師匠に手を振ると私の隣にやってきて

「あいつをよろしく頼む」

それだけ言うと立ち去ってしまいました。

呆氣にとられていた私たちを一瞥して師匠は奥の部屋に閉じこも

ってしまいました。

湯田さんは私の方を見て、ゆっくりと首を横に振っていました。

次の日、いつもより早めに事務所にやってきた師匠は私と湯田さんを見て言いました。

「昨日はすまない。いずれ機が熟せば話すから……」

師匠は強い決意を秘めた瞳をしていました。無言で頷く湯田さん。その強さが少しうらやましいと思っていました。

「約束ですよ、師匠」

「ありがとう、湯田君、春香ちゃん」

師匠は俯き、拳をぎゅっと握りしめ、霞んだ声で答えました。

あの日以来、布具里さんの姿を見ることはありませんでした。師匠はそれでも心のどこかで解っていたのかもしれない。

私の心に布具里さんの残した言葉が深く残ります。

あいつをよろしく頼む。

この日を境に私の、そして師匠の運命は大きく動き始めました。運命の足音は小さく一歩ずつ近づいていました。

第6話 鬼退治(前書き)

先週は更新できずにご迷惑をおかけしました。

第6話 鬼退治

どうすることもできない。それならば何もしないのが賢明だ。そしてあいつの足手まといにならないようにするのが自分の精一杯。自分はいつの役に立てているのだろうか？ ただの荷物ではないのか？

とつくに自覚していた。自分が無力で足手まといで荷物なのは。それでもあいつは優しい。厳しいことを言うが、自分のことを思ってくれる。本当の親友っていうのはああいう奴のことをいうのだろう。

だからあんなに険しい表情をしたあいつを見たとき、何か自分ができることはないか、そう悩んだ。

でもあいつには可愛い弟子もいるし、役に立つ密偵もいる。それでもあいつの表情は変わらない。

悔しい。親友なのに、何もできない。自分は何の役にも立たないこと以上に、それが悔しい。

だから自分はせめてあいつの隣で、あいつについて行くことと思う。あいつの見いだす答えと行き着く先を見守るために。

今日も自分はいつの側にいる。

第6話 鬼退治

「ふう、いいお湯でしたね。身も心も穏やかになりますよっ」

山奥にある温泉宿。美肌効果があることでも有名なこの温泉に一人の女性が訪れていた。

「まつ、そんなことを聞きに来た訳じゃないですよね、和那？」

ほくほくとしつとりとした肌から蒸気を上げた風呂上がりと思しき女性は、鋭く天井を一瞥する。

「ほんま、あんたには呆れるわ、奈桜」

天井がごとりと動いて長身の女性が飛び降りてくる。ヤシヤだ。

「で、何のようですか、和那？」

奈桜と呼ばれた女性は人の良さそうな笑みを浮かべ、ヤシヤを見つめる。

「はあ、その名前で呼ばんといて。今のあたしはヤシヤ、や」

呆れたようにため息をつくヤシヤ。奈桜は人の良い笑みをしたまま、目を細め

「赤龍を抜けたのに……ですか？」

ヤシヤの目がすうつと鋭くなる。そして殺気が迸る。

「何でそのことを知ってるんや？」

「私を誰だと思ってるんです？」

ヤシヤの様子を気にすることもなく、笑みを浮かべたまま続ける。

「三流新聞記者」

ここではじめて奈桜の笑みが崩れた。がくりと膝から崩れ落ちる。

「そ、そんな……。で、でも、裏では結構有名なんですよ？」

持ち直したように奈桜。

「わかってるわ。だからこんな田舎まで来たんや」

「高速歩行術ですか？」

「当たり前やん」

呆れかけの奈桜は少しいたずらっ子の様にくすりと笑い、言葉を続ける。

「それは 七尾祐介のためですよね？」

にやりと奈桜が笑ったことにヤシヤは気づかず、少し恥ずかしそうに

「そ、そや」

「そうですね……。やっぱりできていたんですね」

奈桜の言葉に、ヤシヤは顔を赤くし

「そ、そういう関係とちゃうねん」

「え、本当ですか？　いくところまでいっちゃったんじゃないんですか？」

奈桜の言葉にヤシヤは更に顔をまるで茹で蛸のように真っ赤にしながらも、必死に否定する。

「……………やっぱり、まだ本当の自分は出せないですか……………」

今まで雰囲気を一変させ、奈桜がそつとヤシヤから目をそらすように俯く。

「まだ、あたしは……………」

「言わなくてもいいですよ、わかってますから」

「けどあたしはあいつの力にならなあかん、だから……………」

何かを言おうとするヤシヤを奈桜は目で制し

「あれの場所ですか？」

表情を険しくし、目を細める。ヤシヤの表情も声に合わせて同じく険しくなる。

「ああ、そうや」

止められない、奈桜は一瞬で悟った。それにも関わらず刹那の逡巡、だがすぐに言葉を紡ぐ。

「大江山のどこかに、洞窟があります。その洞窟にあれば眠っているそうですよ。確証は全くありませんけど」

「それでも構わん」

「ガセかも知れませんか？」

強い力を宿した瞳を持ったヤシヤを少し奈桜は羨ましく思った。そして親友として、不安に思った。

「わずかでも可能性があるなら、あたしはそれにすがる」

奈桜は何も言えなかった。ヤシヤはそのまま続ける。

「じゃあ、おおきに。…………妹、見つかると思えな」

ヤシヤはそれだけ言つと奈桜に背を向け、窓から外へと出て行った。後には寂しげな表情をしたまま佇む奈桜が残った。

「和那、またね。いや、もう会えそうにない……です、か」
どんと扉を蹴破る音が響く。奈桜は振り返ることはせず、じつと瞳を閉じた。どこかでこうなることは解っていた。

「我々のことをこそこそと嗅ぎつけやがって」

男の声がする。何者かはもう解っていた。

ぐさりと胸に鋭い痛みが走る。のどの奥の方から嘔吐感がこみ上げてくる。視界がぼやけてきた。

もう助からない、奈桜はわかっていた。だから最後は休むように目を閉じた。

「……ごめん、和那」

奈桜は絶え絶えの息でそれだけ呟くと、やがて動かなくなった。

「雨か……」

汽車の窓に容赦なく雫が叩き付けられる。七尾は夜のように暗くなった空を物憂げに見ていた。

「師匠？」

心配そうに春香が七尾の方を見つめる。湯田が春香の肩をぼんぼんと叩き、首を横に振る。

こくりと頷いた春香はそれ以上何も言わずにただ漆黒に染まった空を見上げる。

刹那、まばゆい光が迸る。そして大きな炸裂音が汽車の窓を振るわす。

かの菅原道真は政敵によって太宰府に左遷され、失意の中、死んだ。そして、道真は怨霊という名の鬼となり、ついには政敵をも呪い殺したと言われている。

今回の依頼はその「鬼」だった。

「……また雨の日に鬼か。つくづく因縁があるらしいな」

七尾はふいに口を開き、自嘲気味に笑った。

「師匠……」

春香は言葉を続けることができなかった。何も知らない自分、それが齒がゆかった。

「七尾君」

湯田の意味ありげな言葉。続ける必要はない。そして言葉で紡ぐべきものじゃない。

「わかってる。わかってるよ、湯田君」

七尾は目を閉じ、そして目をゆっくり開いた。その瞳はいつもの七尾の物だった。

「さあ、行こうか」

汽車がゆっくりと止まる。どうやら目的地に着いたらしい。

ゆっくりとコートを羽織る七尾。春香と湯田も立ち上がり、下車の準備をし始めた。

「ここですか。何か寂しい村ですね」

雨は随分と小雨になっていた。春香は周囲を見渡してぽつりと洩らした。

「そうでやんすね。何もない田舎でやんすからね」

湯田がふうつと疲れたようにため息をつく。七尾はじっと村から少し離れた暗い森をじっと眺めていた。

「さ、今日はもう遅い。宿に行くぞ」

視線を春香と湯田に向け、七尾は側にある小さな宿屋へと二人を促す。

「あ、はい」

「……そうするでやんす」

七尾を先頭に宿屋へと三人は中に入る。中はこじんまりとしているが、落ち着いた雰囲気だった。

「あー、今日は疲れたでやんす。明日から調査でやんすね」

「そうだな」

「あんたたち、まさか興味本位でこの村に来たのかい？」

宿屋の主人が七尾達の話聞き、不快そうな声で聞いてくる。

「いえ、知り合いの新聞記者の人に調査してほしいと依頼されまして」

春香の言葉に主人は顔をしかめる。

「軍隊の連中まで行方不明になったんだぞ」

「えっ？」

七尾が驚いたような表情を見せる。訓練された軍隊が全員行方不明になるなど、考えられなかった。

「だからよ、軍隊のお偉いさんまでこの村に来てるんだ。あんたらも行ったら死ぬぞ」

宿屋の主人はやめとけ、やめとけと盛んに呟く。春香が少し俯く。ぼんぼんと七尾が春香の肩を叩く。

「ありがとうでやんす」

「まあ、ゆっくりしていきな」

湯田が礼を言うと、主人はそれまでの表情と異なり、豪快に笑った。

「で、どうするでやんすか？」

部屋に着いた七尾達は荷物を置いて、くつろいだ状態で話を始めた。

「鬼が出て、行方不明者が続出しているとは聞いたけど、まさか軍隊までとは……」

「でも軍隊は全滅しちゃったんでしょうか？」

春香が疑問に思ったことを尋ねる。

「オイラもそれは思ったでやんす」

「あくまでも予想だけど、鬼は複数いる」

七尾の言葉に春香と湯田は目を丸くする。七尾はそのまま続ける。

「仮に一匹なら、一人を逃がすことができるけど、それができないのは途中で鬼と遭遇しないしかと考えられない。地図で見たけど森

から村までは大きな一本のルートがあるからね。それさえ把握しておけば、まず村へは戻れる」

七尾の言葉に春香が頷く。

「それに大がかりな情報規正がかけられているんだ。世間一般には鬼が目撃されて、写真も撮られていることは一切公表されていない。ただ連続行方不明があるとしか書かれていない」

「となると軍隊も相当苦戦しているみたいですね」

「それにこんな田舎に戦力は割けないからね」

春香の言葉に頷きながら、七尾は言葉を続ける。

「戦力が少ないでやんす」

「ああ、明日タマちゃんが来てくれるとは言え、複数いるとなると厳しいね」

七尾も険しい表情をしながら、頷いた。

「それじゃあ、明日はタマちゃんが来たら、行動を開始するから」

「了解でやんす」

「わかりました」

三人は頷き合った。

翌日、雨こそ降ってはいなかったが、気分を鬱々とさせる曇天が広がっていた。

「何だ、そろいも揃ってそんな辛気くさい顔をして」

二本の刀を持った新聞記者・埼玉珠子は、呆れたような表情をして呟く。七尾はすでに鬼切を抜刀できる状態に、春香も銃をすぐ抜けるように準備をしている。

「まあいい。ここまで問題が大きくなるとは奴らも本腰を入れて動くようだな」

珠子が近くで隊列を作る軍隊の一団を一瞥する。

「え、大神」

七尾が驚いたように声を上げる。

「あ、本当でやんす」

湯田も軍隊の一団の先頭に立つ青年を見つけ声を上げる。

「む、お前達は……」

七尾達に軍服に身を包んだ近づいてくる。

「七尾か。久しぶりだな」

「大神こそ」

軍服を着た青年　大神博之はふうつと息をついた。

「良いのか、離れて？」

「ああ、構わないさ、優秀な副官がいるからな」

「そうか。ところで大神は鬼を……」

「そうさ。まったく面倒なことになってるな」

愛用しているサーベルの柄をなでながら大神。しかし視線は七尾ではなく、珠子に向けられている。

「あんたもいるのか」

「ああ、大神大尉。何だ、私がいて何か困るのか？」

「いや、政府の圧力の脆弱さが出ているなと……」

大神は呆れたように呟いた。その表情にはどこか愁いを帯びた物があった。

「そんなことをあんたにいつても仕方ないか」

「大神、向こうには戻らないのか？」

「構わない。あいつらはどうせ俺の言うことは聞かないような奴らだ」

七尾は軍隊の一団に戻ろうとしない大神を訝しく思いながら尋ねる。

「任月の嫌がらせさ」

大神の言葉に七尾はなんとなく状況を悟った。任月には良い思い出がこれっぽちもない。

「げ、あのおっさんでやんすか……」

湯田も顔をしかめる。誰もあんな傲慢な軍のお偉いさんに良い印

象を持ちはしない。

「ということだ。どうせ鬼を倒すんだろう？　ならば俺も連れて行け」

「戦力の面を考えても大神さんの加入は大きいと思います、師匠」
春香が躊躇する七尾に言う。

「この娘は？」

大神が春香を見て、七尾に尋ねる。

「倉見春香ちゃん。俺の弟子」

「なかなか隅に置けんな」

まじめな顔をしたまま、大神が七尾の耳元で呟く。

「そんなことよりもう出発してもいいでやんすか？」

「ああ」

湯田の問いに七尾は頷く。大神を加えた一行は森へと進んでいった。

後には今にも泣き出しそうな雲だけが空を覆っていた。

鬼は森の奥、小高い山　通称、貴堂山にいるという情報に従って、七尾達は貴堂山を目指していた。

「のっぽの女がいないのは痛いでやんす。気を紛らわすこともできないでやんす」

湯田がぼつりと呟く。ヤシャは現在、大江山にいるのだが、そのことを七尾達は知らない。

「確かにヤシャがいないのは痛いな。複数いるとなると……」

「かなり厳しい……ですか？」

春香の言葉に七尾は頷く。

「森が終わるな」

大神が前方を指さす。今までとは異なり、開けた砂肌が七尾達の目に飛び込んでくる。

「ん、気をつける。これから先は何か異様な気配がするぞ」
今まで黙っていた珠子が風神剣と雷神剣を抜刀する。

「湯田君、これを」

七尾は後ろにいる湯田に白い布で包まれた箱を渡す。

「七尾君、これは？」

「どうしようもなくなつたときに使つてくれ」

七尾の真剣な表情に湯田は黙って頷くしかなかった。

「師匠、行きましょう」

春香に促され、七尾は少し早めに歩き始める。湯田はじつと七尾の後ろ姿を見つめていた。

「む、何かくるぞ」

森を抜け、荒れた斜面を上がっていた七尾達は、珠子の鋭い声で立ち止まった。

「上だ！」

大神の怒号と、腹に響くうなり声、そして何かが空気を切り裂く音。

七尾は刹那に揺れた地面のせいで、体勢を崩す。

「お、鬼でやんす！」

湯田の悲鳴が響く。そしてそれをかき消す複数の唸り。

「雷神剣、轟け！」

裂帛の声と共に響き渡る炸裂音。珠子が二倍以上ある大きな鬼と対峙していた。その横では大神と春香が別の鬼と戦っている。

「七尾君、後ろでやんす！」

湯田の声で七尾はさらに別の鬼がいることに気がついた。

「うおっ」

鋭い右腕の一閃。間一髪仰け反る七尾。

「しまっ……」

ぐらりと七尾の体勢が再び崩れ、体がふわりと浮く。

「七尾君！」

湯田の悲鳴と共に七尾は斜面の下へと消えてしまった。

「師匠！」

春香の悲壮な声。そこに鬼の丸太のような豪腕が振るわれ、春香も吹き飛ばされ、斜面の下へと消えてしまった。

「春香ちゃん！」

「メガネ、どける！ 轟け、雷神剣！」

珠子の怒号、そして迸る蒼い閃光。鬼達に襲いかかり、骨すら残らず焼き尽くす。

「七尾君！ 春香ちゃん！」

湯田の魂を振るわす絶叫が貴堂山に響き渡った。

「春香ちゃん！」

痛い、体中がきしむ。痛い、動きたくない。痛い、でもどこか暖かい。

「……………ん、し、しょ……………う……………」

春香は目を覚ました。七尾の心配そうな表情、でも額からは血が流れている。それなのにその温かさが今は春香にとって心地よかった。

「大丈夫？」

「だい、丈夫です」

いつまでもこうしてるわけにもいかない。春香は痛む体に鞭を振り、起き上がった。

「師匠こそ、ぼろぼろじゃないですか」

「さつき、一戦交えてね」

そう言っ七尾はウインクした。じわっと瞼にこみ上げてくる物があった。春香は七尾の胸に飛び込んだ。

「師匠、師匠！」

「大丈夫、まだ行ける」

不意に七尾の声色が不意にこわばる。そして刀が抜かれる音。

「鬼……………」

春香は七尾の胸にすがったまま、振り返る。先ほどの鬼より一回り以上も大きい黒い鬼が立っていた。

「春香ちゃん」

七尾が春香を引き離す。こくりと頷いた春香。ポケットから銃を抜く。

満身創痍の男女が鬼に勝てるとは思えない。だが、七尾は冷静だった。

素早く左腕で銃を抜き、瞬時に鉛玉を連続して放つ。弾が切れたところで黒鬼に向かって銃を投げつけ、一気に距離を詰め、鬼切を振るう。

鬼の腕を切り飛ばす。

「うおおお！」

鬼切の一閃の反動を利用し、回し蹴りを打ち込む。すかさず黒鬼も反撃に移るが、春香の正確な発砲がわずかな時間を七尾に与える。

「食らえ！」

隠し持った爆弾を黒鬼にぶつける。そして飛び退く。一呼吸置いて爆弾が炸裂する。

「どっ……………っ！」

勝利を確信した七尾だったが、煙から現れる影を見て、春香の前に立ち、鬼切を構える。

「かなり弱っている、今だ」

煙の向こうからの声、響き渡る銃声や炸裂音、そして黒鬼の絶叫。煙が晴れてくる。

「っ！」

七尾は驚いた。無残に引き裂かれた黒鬼、嫌なにおいが立ちこめる。

「師匠、これは」

「何が起きたんだ……」

七尾達は状況を把握できずに立ちすくんだ。すでに黒鬼を殺した者の気配はなく、貴堂山を覆っていた異様な雰囲気は薄れつつあった。

「た、助かったんですかね？」

「そ、そうみたいです……」

七尾がふうつとため息をついた瞬間、どこからとも無くまるで何かを嘆いているような叫び声が耳に入ってきた。

「春香ちゃん、聞こえた？」

「あ、はい」

緊張の糸が切れたのか、春香は七尾に体を預けたまま、答える。

「嘆いている、そんな風に聞こえますね」

「うん……」

嘆きの叫び声はしばらく続き、やがて小さくなっていった。

「おーい、生きてるでやんすかー！」

「湯田君の声だ」

不思議と気持ちを落ち着かしてくれる懐かしい声が出て、二人は顔を合わせて笑った。

「まったくめんどいな。ここの妖し」

ヤシヤはぼさぼさになった髪をぼりぼりと掻いた。周りには人ならざる者たち。人里離れた場所ではこのような者達はまだこの時代には存在していた。

「ん、風が変わった？」

ヤシヤは手に持った槍をおろし、東の方角を眺める。人ならざる者達もそそくさとヤシヤの前から去っていった。

「嫌な感じや。こりゃ何かあるで」

残った人ならざる者達を一払いでなぎ倒す。

「急がなあかんか。はよ、あれを」

ヤシャは険しい顔をしたまま、駆け抜けていった。

相変わらず東の方からは気持ち悪いほど生暖かい風が吹き抜けていた。

第7話 巨竜探し

あたしはこれからどうなるのか。どこへむかっているのか。わからない。ただ言えるのはあたしには幸せは決して訪れないということ。

血にまみれ、組織のために生きてきたあたし。業はいつあたしを襲うかわからないほど多い。

それでもあたしはもがきあがき続ける。

ハッピーエンドを迎えるために。あいつに差し伸べられた手を掴むために。

だからあたしは今日も戦い続ける。あたしにはそれしかないから。

第7話 巨竜探し

「大丈夫でやんすか？」

湯田は額に包帯を巻いた七尾に尋ねる。病院独特のエタノールの臭いが湯田の鼻をつんとつく。

「大丈夫だつて、ちよつと跡は残るかも知れないけどね」

七尾はくすりと苦笑しながら、答える

「はあ、本当に心配したんでやんすよ。七尾君と春香ちゃんが落ちてから、ずっとタマちゃんと大神が戦っていたんでやんすからね。しかも鬼が急に消えるでやんすし」

「ああ、ごめんな。心配かけて」

「とにかく春香ちゃんも無事でよかったでやんすよ」

湯田はめがねを外し、目をこする。七尾は穏やかに笑った。

「オウ、男の友情は素晴らしいです」
突如聞こえた声。

「えっ？」

驚いた二人は慌てて声の主を探す。

「あ、アルベルト」

「オウ、久しぶりでーす」

白人の男、アルベルトが立っていた。彼の両腕には鮮やかな黄色の花束。

「おいおい……」

「……菊でやんすね」

湯田と七尾の呆れた様な表情に気づかず、アルベルトは「ごそごそ」といつもの派手なグリーンの上着のポケットを漁る。

「何をしてるんでやんすか？」

訝しげに湯田。

「捜し物でーす。ちょっと待ってくださいーい」

ポケットの中から一枚の小さな写真を取り出す。七尾はその様子を黙って眺めていた。

「オウ、コレでーす」

アルベルトは七尾と湯田に見えるように写真を渡す。さほど興味なさげな表情をしている七尾が目を見開いた。

「これ……恐竜じゃないか」

写真には鋭い牙の生えた口を大きく開けている大型の恐竜が写っていた。

「しかもこいつは……」

「そうでーす。ティラノサウルスでーす」

七尾の表情が驚きに包まれる。

「これ、どこで撮ったんでやんす？」

うさんくさそうに湯田が尋ねる。この写真を信じていないらしい。

「これは私がCIAに潜入して撮ってきたものでーす」

うさんくさいことを言うアルベルト。要するに国家機密と言いた

いらしい。

「で、何をすればいいんでやんすか？」

湯田の問いに七尾も同意する。アルベルトがここを訪れたのは何かの依頼以外には考えられないからだ。

「オウ、それでーす。七尾サンにその島まで行って島の主を探してきて欲しいのでーす」

アルベルトの言葉に七尾は目を剥く。

「主ってこいつのことやんすか？」

湯田が牙を剥くテイラノサウルスの写真を指さす。

「こいつはT・REXでーす。非常に凶暴で軍隊の一部隊を全滅させまーす」

「それってかなりやばいんじゃない？」

「ああ、やばいな……」

二人は呆れながら相変わらず意味不明なことを話すアルベルトを眺めていた。

「うつつ、気持ち悪い……」

船のてすりに寄りかかり、ぐったりとした春香が呟く。

「大丈夫か、春香ちゃん」

春香の背中をさすりながら、七尾は心配そうに春香の顔をのぞき込む。

「師匠、すみません」

こみ上げてくる嘔吐感を抑えながら、春香は弱々しい声で謝る。

「あら、大丈夫ですよ？」

「あ、鈴音さん」

春香の体を自らの預けさせた七尾に洋装の美女が声を掛ける。木岡重工の令嬢・木岡鈴音だ。

「ここより、部屋の中にいたほうがいいですわ」

「そうですね」

七尾は春香に確認を取ると、春香を担ぎ上げる。

「し、師匠」

春香の顔が少し赤くなる。俗に言うお姫様だっこという奴を七尾は春香にしたのだ。

「さ、行くよ」

「後でじいに酔い止めを持ってこさせます」

「あ、ありがとうございます」

七尾は鈴音の方を一瞥すると甲板の奥へと消えていった。

「ふう、大変でやんすね。ってあんたは何をやってるんでやんすか？」

春香の様子を少し離れたところから見ていた湯田がとなりで一心にサーベルを磨く偉丈夫に声を掛ける。

「見ればわかるだろう？ このサーラーサーベルを磨いてるんだ」

偉丈夫の水夫・青野柴夫はきらりと太陽の光を受けて光るサーベルを掲げた。その瞳の奥に不穏な雰囲気を感じる。

「そろそろまた試し切りがしたくなってきた」

湯田の予感は当たる。

「試し切り、させてくれ」

ぬすつと一歩づつゆっくりと青野が近づいてくる。

「ひい……」

「いくぞ」

甲板に湯田の悲鳴が響き渡った。

「ここか」

「そしてみたいですね」

照りつける太陽がまぶしい南の島に七尾達は降り立った。白い砂浜の奥には鬱々としたジャングル。

「あれ？ でも植生が変わってますね、この島」

春香がジャングルの木々を指さす。七尾も春香の言いたいことに気がついた。

「ど、どういうことでやんす？」

湯田が困惑したように二人の顔を交互にのぞき込む。

「ここの植生、被子植物がないんです」

「恐竜が生息していた時代は松とかイチヨウみたいな裸子植物が全盛期だった。そして恐竜が繁栄した中生代の末期・白亜紀になって花を付ける被子植物が出現した。だから、裸子植物は被子植物にとつてかわられた」

「草食恐竜がえさにしていた裸子植物が減少したから、巨竜が絶滅したとも言われているんですよ」

春香と七尾の説明にふむふむと湯田は頷く。

「ですが、変ですわね。あそこに何か看板がありますわ」

鈴音がジャングルの隅に立てかけられた看板を指さす。

「何でやんすかね？」

「猛獣注意とかじゃないか？」

あれこれ言いながら看板に近づく七尾達。看板はどうやら最近立てられたものらしく、綺麗に整備されていた。

「恐竜の見られる島『イスラ・ヌブラル島』へようこそ、って書いてあるでやんす」

湯田の言葉を聞いた七尾はげんなりとした様子ではあつとため息をついた。

「これ、明らかに国家機密って感じじゃないですよね」

「そつで……」

頷いた湯田の声を大きな叫び声がかき消す。全員が空を見上げる。

「あ、あれって……」

「ああ、プテラノドン……いわゆる翼竜って奴だ」

上空を旋回する黒い影を見ながら呟く。ちなみに厳密に言えば翼竜は恐竜には含まれない。

「これは楽しみだ。切り甲斐があるな」

青野がセーラーサーベルを抜こうとする。湯田がさっと七尾の後ろに逃げる。

「とにかく、ジャングルのほうに行こう」

七尾の声に一同は頷いた。

「久しぶりの冒険ですわね」

「そうですね。震災の後は色々ごたごたがありましたからね」

鈴音の言葉に七尾は頷く。

「鈴音さんも冒険家になったそうですね？」

「ええ、じいにはよく小言は言われますけど、それでも楽しいですわ」

「まったくです、お嬢様」

「これっ、じい」

執事の藤田さんは人の良い笑みを浮かべた。なんだかんだ言っても藤田さんは鈴音の味方なのだ。

「師匠、何か来ますよ」

緊迫した春香の言葉に、場の空気が一気に引き締まる。懐から銃を取り出す七尾。

「来た！」

小型の恐竜が群れをなして襲いかかってくる。腕には鋭い爪。

「デイノニクスだ」

鈴音が素早く対戦車用ライフルを放っていく。

「切る、切る、切る！」

青野はライフルをくぐり抜けたデイノニクス達を次々と切り捨てていく。

「くっ」

だがそれにも限界があり、青野の体にはあちこちに傷ができてい

く。

「うおりゃ！」

七尾が鬼切を手に青野に加勢する。そして春香が後ろからの確な援護射撃を行う。

しかし戦局はいつこうに良くならない。

「う、しまっ……………」

体勢を崩す七尾。傷が完全に癒えておらず一気にダメージが出た形になってしまった。

そこに強烈な炸裂音。そして嫌なにおいと絶叫。

「大丈夫でやんすか？」

「ゆ、湯田君」

湯田が放った爆弾が七尾を救った。さらに爆弾の音に驚いたのか、デイノニクスの群れが逃げていく。

「た、助かりましたね……………」

その場にへたりと春香が座り込む。

「いや、どうやら連中がいなくなったのは、ここらへんの主が現れたからだな」

セーラーサーベルを構えたまま青野が空を睨む。わずかに揺れる

大地、ジャングルの奥から響く何かの咆吼。

「ちよ、ちよっと待つでやんす。も、もしかして……………」

「もしかしなくても…………、奴だ」

七尾は鬼切を杖代わりにし、立ち上がる。

「やるしかありません」

鈴音もライフルに弾を詰め、構える。

「師匠、やるしかないですよ。生きるか死ぬかどっちかなんですから」

春香も立ち上がる。その目には強い光が宿っていた。

「オイラもやってやるでやんす！」

湯田が最後に立ち上がる。

「来るぞ！」

青野の怒号、そしてジャングルの奥から現れる常軌を逸した大きく獰猛な巨竜。

「湯田君。ありったけの爆弾で奴の T - R E X の動きを止める！」

「了解でやんす」

春香も手伝い、爆弾を次々と放っていく。

「青野と鈴音さんは陽動を」

「わかりました」

「まかせろ」

青野が斬りかかり、反撃に出ようとしたところ鈴音がライフルで牽制する。

一瞬だけだが、T - R E X の動きが鈍くなった。

七尾が素早く駆け出す。狙うは一点。ほぼ全ての生物の急所・体の動きを司る……。

「脳天だ！」

頭を下げていたT - R E X に鬼をも切り裂く鬼切の鋭い白銀の刃が貫く。

いった。七尾の手に、精神に、仕留めたことが伝わる。

「危ないでやんす！」

苦痛にT - R E X が頭をぶんぶん振り、刺さった刀を抜こうとするかの如く暴れる。そのため、頭の上にあった七尾は耐えられるはずもなく、地面に落下する。

激痛で気を失いそうになるが何とかこらえる。しかし体が動かない。そこに苦しみを与えた七尾に復讐をするかの如く、T - R E X がその鋭い牙を剥き、迫ってくる。

「ま、まずい！」

青野の緊迫した声。そして刹那の銃声、T - R E X が力尽きて地面を大きく揺らす。春香と湯田が振り返る。元来た道から現れる緑の上着を着た白人の男。

「ハーイ、七尾サン、大丈夫でーすか？」

やってきた男は陽気に笑っていた。

「どうしてあんたがここにいるんだ？」

春香に解放されながら何とか助かった七尾がアルベルトに尋ねる。

「私、アメリカのハリウッドで映画監督してまーす。今回は恐竜の映画を撮ろうとしてまーす」

「そういえばそうでしたわね」

アルベルトの言葉に反応したのは意外にも鈴音だった。

「え、知ってるんですか、鈴音さん」

「ええ、前にアメリカに行ったときに……。結構有名ですわよ？」

「ふーん、これがでやんすか？」

うさぐさそうに湯田がアルベルトを見る。

「オウ、私を疑っているのですかー？」

「じゃあ、どんな映画を作ったんだ？」

七尾が尋ねる。

「地球の外から来た生物と戦う映画や、未来に行く映画、未来からやってきたロボットの映画、人食い鮫の映画などーす」

「それが結構流行っていたみたいですよ」

鈴音の言葉に七尾は世の中何が流行るか解らないと呟いた。

「話は変わりますけど、何でこの島には絶滅したはずの恐竜が生息しているんですか？」

春香がアルベルトに話しかける。

「オウ、それがわからないのでーす。最近、突然現れたのでーす」

「奇妙な話ですね」

「ああ、にわかには信じがたい」

「ですが、これではつきりしました。この島は危険でーす。早く避難しましょう」

アルベルトに促され、七尾達は島をすぐに離れた。どうやら恐竜

を軍隊が一掃つもりらしい。

七尾の中には相変わらずしこりがのこっていた。

どんどん小さくなっていく島は、遠目には何も変わらないように見えた。それが堪らなく七尾の気持ちを虚しく感じさせた。

第8話 悪霊の村(前書き)

土曜に更新できずに申し訳ありませんでした(汗)

第8話 悪霊の村

窓から入ってくる風は不自然なほど冷たかった。夏も終わりといえ、まだまだ残暑という言葉が似合う頃だ。

「風が涼しいですね」

春香が箒を持つ手を止め、ぼんやりと外を眺める七尾に声を掛けた。

「ああ、そうだな」

「でも、この風、気持ち悪くないですか」

どこか上の空の七尾に春香は言葉を続ける。

「確かに。社会情勢も不安定だし、どうも最近、世の中がおかしい」
「ようやく春香と会話する気になったのか、七尾が窓から視線を外した。」

「普通選挙法と一緒に治安維持法が発令されましたよね。あれって危険なんじゃ……」

「ああ、あの法律だと政府に刃向かう人間は全て捕まえられるからね」

後に多くの悲劇を招く法律に七尾達もまたその危険性について気づいていた。

「それにしてもヤシャさんの帰りが遅いですね」

「だな。全く何をしているんだか……」

七尾はぼんやりと天井を見上げる。ふと外が騒がしいことに気がついた。

「噂をしたら……」

「ああ、帰ってきたな」

湯田の騒ぎ声とヤシャの呆れた様な声。春香がくすりと笑う。七尾も知らず知らずのうちに苦笑を浮かべていた。

第8話 悪霊の村

「ほんま、死ぬかと思ったわ」

七尾達に迎えられたヤシヤはぼろぼろだった。衣服はぼろぼろ、大事に扱われていた自慢の槍も穂先があちこちが欠けてしまっている。

「何やってきたんでやんすか？ まさか鬼とかと殺ってきたんじゃないでやんしょうね」

「まあ、そんなところや」

あははと愛想笑いを浮かべ、湯田の言葉をはぐらかすヤシヤ。七尾は少し訝しげに彼女を見ていた。

「ちよつと疲れたわ。ここで休ましてく、ね……」
ぐらりとヤシヤの細長い体が揺れ、七尾の方へと体が傾く。七尾は慌ててヤシヤを受け止める。

普段、豪快に槍を振るう彼女だが、身長割に華奢な体をしていることに気がつく。

「ま、今はゆつくりと休むと良いよ」

意識が飛ぶ中ヤシヤは七尾の優しい呟きを確かに耳にした。

「よっほど疲れていたんでやんすね。どうするでやんすか？」

「とりあえず、奥の部屋で寝かせておこつ」

穏やかな寝顔を浮かべたヤシヤを湯田が一瞥する。

「それと智美さんが来るから準備を頼む」

「了解でやんす」

湯田は頷くと急いで走っていった。七尾は湯田を一瞥するとヤシヤを抱えたまま歩き出した。

「あ、智美さん」

七尾がヤシヤを奥の部屋に連れて行って、戻ってきたとき既にそこには四路智美の姿があった。

「あら、お久しぶりね」

「わざわざ京都までどうしたんですか？」

「来ちゃダメなの？」

からかうように智美。七尾は苦笑するしかなかった。

「それはいいの。貴方、前に大神君と会ったわよね」

「そう言えば、ありますね」

智美の言葉に七尾の表情が急に険しくなる。ぴりりとした戦闘さながらの空気があたりを覆う。

「あのときの話を聞いてね。ちょっと調べてみたの」

「何をですか？」

「鬼、について」

智美の口の動きに合わせて、七尾の眉がぴくりと動く。

「それで？」

「あの地域一帯には鬼に関する伝承がとても多いの。というか異常ね。鬼の伝説なんて日本全国どこにでもあるものだし」

「確かにそうですね」

「鬼って元来悪いイメージがあるけど神として祀られているものもあるのよね」

智美が机の上に資料を並ばせはじめ。

「あの地域の鬼は後者なの。実際は人々には恐れられているんだけど」

「なるほど、誰かが意図的に近づかせないようにしてるのか」

「その通りよ」

七尾の言葉に智美は静かに頷く。

「ここからが本題。最近ね、どうもこのあたりの村で悪霊の叫び声がするらしいの」

もう一度、七尾の眉がぴくりと動いた。智美の目はそれを見逃さなかった。

「何か知ってるの？」

「その悪霊の叫び声らしきものを聞いたことがある」

「それ、本当？」

「ああ。湯田君と大神はその場にいなかったから知らないけど」

「実はあの近く、ほこらがあってね。最近それが何者かによって破壊されていたの」

七尾は驚いたように目を見開く。

「そこで、貴方にも調査を手伝って欲しいの」

智美の言葉に七尾はすぐに頷いた。

空はどんよりと黒にも近い雲に一面覆われていた。その黒さが事態の大きさを物語っているように七尾は覚えた。

「前来たときより、なんて言うか……」

「空気っていうより雰囲気物が物凄く悪いでやんす」

春香の言葉に湯田が続ける。

どんよりとした負の空気がこの村だけではなく辺り一帯にまで蔓延していた。七尾は顔をしかめながら、鬼切を取り出す。

「し、師匠？」

「油断するなよ。この前以上にここは危ないらしい」

七尾の表情を見た春香は、気を締めて、自身も懐から銃を取り出す。

「さて、来たわね」

智美が小さく点った灯りをじっと見つめながら呟く。

「七尾君、あれって……」

「ああ、大神だ」

灯りの火が近づくと共に人の輪郭が浮かび上がり、人影が軍服に

身を包んでいることがわかった。

「お前達もいたのか」

大神の顔がはつきり解る距離まで来ると、いきなり呆れた様に咳いた。

「私が呼んだの。それに貴方だけじゃ厳しいでしょ？」

智美の言葉に大神は黙って頷く。その表情は非常に険しいものだった。

「何かあったんでやんすか？」

「……今この村一帯は軍によって封鎖されている」

湯田の問いに、ぽつりと大神が言葉を洩らす。

「封鎖？」

「そうよ。この辺り一帯は悪霊の声ともう一つ。あり得ないものが出てきているの」

「あり得ないもの……ですか？」

首をかしげる仕草をする春香に智美が頷く。

「亡者、いや、ゾンビといった方がわかりやすいだろう」

智美の代わりに大神が続ける。

「ゾンビか。カビンダ博士は死んだし、資料も軍が全て処分したんじゃないかったか？」

「ああ。したとも。だが、どうやら今回は勝手が違う」

「人為的に生み出された者じゃなくて、どこからか自然発生してるのよ」

智美の言葉に七尾の顔が歪んだ。

「現在、陸軍が必死にゾンビ共を掃討しているが、如何せん倒しても倒してもまるで湧き水のように湧いてくるんだ」

「私は、例のほこらと何か関係あるんじゃないかって思ってるの」
「なるほど、そこで俺達にもゾンビと悪霊の正体を探れと」

「そういうことね」

智美は頷くと、すぐに村の外れ、森の方へと一人歩き出した。慌てて七尾達もその後を追いかけた。

「何でやんすかこの山は。前の鬼の時より酷いでやんす」

ぐっしよりと汗を含んだ衣服を気持ち悪く思いながら湯田はその場にへたり込んだ。

「はあはあ。確かに」

疲弊して座り込む春香の背中をゆっくりさすりながら、七尾は荒い息を整えていた。

「まさか、ここまでとはね」

智美もあたりを警戒しながらもふうつと息をついていた。

「軍隊も戦闘力こそ劣るが数の多いゾンビ達に苦戦している」

「わかる。こんだけ出てこれれちゃ敵わない」

七尾の言葉の通り、山に入った途端、どこからとも無く落ち武者のゾンビやら怪しげな山伏の亡者といったようなものにひっきりなしに襲われていた。休憩する暇さえない七尾達は、ひたすら刀を振るい、弾丸を浴びせ、ここまでやってきたのだ。今こそ、湯田の持ってきた聖水のお陰でやっと休息にありつくことができたのだ。もっとも聖水の効果がいつまで持つか解らないので油断はできないわけだが。

「こんな時にのっぽの女がいれば良かったのに……」

「今更言ったところで仕方ないだろ。行くぞ」

鬼切を既に抜刀した七尾が背を向けたまま、口を開く。

「もうほこらまではすぐそこよ。一気に行きましょう」

湯田を促し、智美は駆け出す。

「行きましょう、湯田さん」

強く銃を握りしめた春香が七尾の後に続く。

「……わかったでやんすよ」

はあつとこの山に入ってから何度目か解らないため息をついて湯田は駆け出した。

はずだった。

その足首を地面から何者かが掴んだ。

「ゆ、湯田さん！」

春香の悲痛な声、そして銃声。湯田の後ろに迫っていた修験者の亡者を打ち据える。

「やった？」

春香は油断無く銃を構えていたが、不意に横から急に落ち武者の姿が目映る。

そして刹那の衝撃。

気がつくとき春香の体は宙に浮いていた。

地面にそのままゆっくり落ちていく。その様子はまるで時がゆっくりと動いているようだった。

「春香ちゃん！」

七尾が修羅の如く春香の周りにいるゾンビや亡者を切り捨てていく。

「七尾、一人で行くんじゃない」

大神がサーベルを構えて突撃する。智美がその後ろから援護射撃を行う。

「どけよ」

すごんだ声で七尾が春香の前に仁王立ちする。七尾の右手の鬼切が七尾の感情に合わせるかのようにびくんびくと脈打つ。

七尾を前にゾンビや亡者は一歩も動けなかった。

炸裂音が刹那に響き渡る。湯田の爆弾だった。運良く爆弾を逃れたゾンビや亡者達も大神と智美に倒されていく。

「大丈夫か、春香ちゃん」

「すみません、師匠。しくじっちゃいました」

苦痛に顔を歪めながらも笑う春香は痛々しかった。左の脇腹から止めどなく血が溢れている。

「七尾！ お前は智美さんで行け」

大神がその場にサーベルを突き刺す。そしてポーチの中から包帯

を取り出す。

「一刻も早くこいつらを止める。じゃないとこれ以上はまずい」

「だが……」

「七尾君、オイラと大神に任せるでやんす」

七尾の言葉を湯田は遮り、聖水の蓋を開けた。

「けど」

「くどいでやんすよ、七尾君。オイラが守りは何とかするでやんす。その間、大神には春香ちゃんの治療をしてもらうでやんす。それにアンタがいなくてこの事件を解決できそうにないでやんすから」

強い意志を込めた目で湯田は七尾を見据える。七尾はその目をそらすかのように、智美を促す。

「し、しょ、う」

春香が起き上がろうとわずかに半身を上げる。

「頑張つて、ください。師匠、私、信じて、ます」

七尾は頷く代わりに鬼切を天高く掲げた。

「それでこそ、七尾だ」

智美と共に更に先へと進んでいく七尾の姿を遠目で確認して、大神は呟いた。

「ここだわ」

廃墟と化したほこらを一瞥して、智美は七尾に近づいた。

「嫌な気配しかしないな」

「ええ」

七尾の言葉に智美は頷く。吐き気を催すような不快な雰囲気。

「この石碑が元か」

「そうみたいね」

ほこらに不自然に建てられていた子供の背丈ほどの高さの石碑がある。そこからゾンビや亡者と同じ不快な雰囲気が出ていた。

「切るぞ」

七尾は鬼切を一閃させる。ぱきりと意外なほどもろく石碑が崩れる。

「これで……」

「そうは行かないみたいよ」

智美の声と共に、何かの絶叫。そして、凄まじい風圧。

「ゾンビって言うよりフランケンシュタインみたいだわ」

素早く距離を取りながら銃を構える智美。

「確かに」

人の5倍はあるつかという背にあちこち縫合された両腕。しかもそれが4本。

「これで顔が三つあって腕が後二本あれば阿修羅だ」

あっという間にフランケンシュタインの4本の腕を切断する七尾。

その目は一切言葉とは裏腹に笑っていない。

「そうねって、貴方、もうあの怪物倒したの？」

「ああ。手加減は一切してない」

鬼切を鞘に収めながら、七尾。その目は一寸の揺らぎすら見えなかった。

まさか七尾祐介の本当の実力がこれほどとは、と智美は目を細めた。今まで幾度となく七尾と行動を共にしてきたが、これほどの動きをしたことはかつて一度もなかった。

先ほどの七尾はフランケンシュタインに一切の反撃の機会、いや時間を与えなかった。しかも恐ろしいほどの切れ味だ。

「戻ろう」

そう言った七尾の表情は、先ほどとは打って変わり愁いに満ちていた。智美は何も言わずに七尾の後に付き従った。

ほこらとこの山を立ちこめていた不快な雰囲気は薄れつつあった。

「まさか、七尾祐介があれほどだとは」

丸渕眼鏡をかけた女が呟く。漆黒のローブが不気味に映る。

「仕方ないさ、あれはあの方が、一番恐れている者だからね」

やせた不健康そうな男が答える。男の格好は女とは異なり、術士が着るような服だ。

「いずれにせよ、我々の計画に死角はない。七尾祐介という障害があっても」

女はそう呟くと、音もなく消えた。

「やれやれ、こちらの身にもなれよ」

不健康そうな術士は、女がいなくなつたのを確認すると、ぶつぶつと愚痴りながらその場を離れた。

第8話 悪霊の村（後書き）

第9話と最終話は同時に投稿します。いよいよクライマックスです。

第9話 穢れ神（前書き）

更新が滞り申し訳ありませんでした。以前、最終話と一緒にUPすると言いましたが、都合により近日中にUPすることになりました。

第9話 穢れ神

「どうしたって行くんでやんすか？」

黄昏時の夕日が窓から光の筋を浮かび上がらせている。恐ろしいほど静かなその部屋に湯田の声だけが響き渡っていた。

「ああ……」

七尾の冷え切った瞳を一瞥する湯田。ぞくりと背筋が震える。

「じゃあな、湯田君」

岩のように固まったまま動かない湯田を一瞥して、七尾が横を通り過ぎていく。

覚悟は決まっている、止めることなどできない、一瞬にして湯田は悟った。

どうすることもできない。それが何故七尾がこんな事をするのか解らないと言う気持ち以上に強かった。

悔しい。動くことのできなかつた自分を恨めしく思いながら、湯田は血が滲むほど拳を握りしめた。

第9話 穢れ神

「ほんまにいいんか？」

「ああ……」

黄昏時の駅の前、一組の男女が対峙していた。男は長いコートを羽織り、手には旅行用の鞆。七尾だった。

一方、女は黒いチャイナドレスのような格好。女性にしてはかなり背が高い。こちらはヤシヤだ。

「理由はあれか……」

「ああ、あれの復活を止める。だから……」

「わかってる。元から止めるつもりもない」

ヤシヤは肩をすくめて、息をついた。

「……あたしから言えるのは、生きて帰ってこいってことだけや」

「わかってる」

厳しい表情をしたまま頷く七尾。その姿はどこか悲しそうに見えた。

「……なあ」

歩き出そうとした七尾の耳にヤシヤの声が響く。歩を止め、振り返る。

「気いつけや」

「ああ」

七尾は頷くと踵を返して再び歩き始めた。ヤシヤはその悲壮な覚悟を込めた背中を眺めていた。

「……言えんかったなあ。行かないでって」

柄にもないと呟いたその声は少し冷たい秋風に流されて消えた。

「さあ、出てきいや。わかってんねんで、あんたらがそこにいるのは」

七尾の姿が消えた後、ぽつりとヤシヤは呟いた。ざっと数人の男が出てくる。その手には様々な武器が握られている。

「こっから先には行かせへんで」

いつもと異なった黒い槍を構える。ぎろりとヤシヤの目が光った。一陣の風が吹き抜けた。

朝の光がまぶしい。だが、吹き抜ける風は恐ろしいほど冷たく、真冬のことを思い起こされる。

七尾はコート裾をぎゅっと握りながら、崖下に広がる小さな廃

墟を眺めていた。

お前は、母さんの出生を知っているか？

その言葉からはじまった父からの手紙。あの日から七尾は何となくではあるが、こんな日が来るのではと思っていた。

「親父……」

堤と共に南米に旅立った後、音沙汰は一切無い。遭難したのかはたまたひよっこり生きているのか。

どちらにしても面倒な問題を抱えてしまった。それを親父のせいにすることはしたくなかった。

「手紙にはこのこと書いてあった。でも肝心の社が見えないぞ」

手紙には村の存在と側にある小さな社が記されていた。しかし、社のような建物はどこにも見当たらない。

「とりあえず村に行ってみるか」

七尾は谷を下り、かつて村だった廃墟へと歩を進めた。とちゅうから濃い霧がかかりだし、嫌な気配が増してきた。

「この光景……」

霧を抜けた先には古ぼけた廃墟が並んでいた。先程七尾が谷の上から見ていたものだった。それだけではない。七尾は強烈な既視感を覚えた。

少し頭がずきりと痛む。頭の中、記憶にもやがかかっている、はつきりと見えない。

この子を。守らないと。

ノイズと共に女の声が聞こえる。強烈な激痛が頭を、全身を走らせた。

お前も。お前も、逃げろ！

今度は男の声がした。聞いたことのある声だ。だが、思い出せない。

無理よ。あの方からは逃れられない。

ノイズの音が酷くなった。頭を抑えながら、七尾は意識を集中させた。もう一つ。あと一つ、ピースがあれば、繋がる気がする。

祐介をお願い。

女の悲しみの声が聞こえて、七尾は全てを悟った。これは、母親だ。顔も覚えていないが、確かにそうなのだ。

だから

「……運命か。そんな言葉は使いたくないけどな」

七尾は立ち上がった。さっきまでの痛みはもう既に消え、そして廃墟の奥には社らしきものが見えていた。

「……上手いこといったかな……。ほんま、大馬鹿野郎やで、あいつは」

男達を倒したヤシヤは感触を確かめるように黒い槍に手を触れた。

「ヤシヤさん！」

若い女の声が響く。洋装に身を包んだ少女がヤシヤの方に手を振っている。

「春香ちゃんやん」

「ヤシヤさん、師匠はどこですか？」

春香が近づいてくる。びりつと空気が変わった。普段のおっとりした様子からは想像できないほど鋭い目でヤシヤを見据える。

「……………」

ヤシヤは目を合わせたまま、沈黙を守った。

「……ひとつ言えることがある。今、あいつは危険なことをしてる」
観念したように口を開き、言葉を続ける。

「あんたらが付いてったら確実に死ぬような場所や」

突き放すように言い放つヤシヤ。その声は先程までと違い冷たかった。

「それでも、私たちはついていきたいんです。仲間だから」

必死の形相の春香を見て、ヤシヤは春香に対する認識を変えた。芯がしっかりしていると。

「わかったわ。ついてきい。そこでこそ隠れてるメガネもな」
「ち、ばれてたでやんすか」

「当たり前やん、あたしを誰やと思ってんねん」

物陰から出てきた湯田にぱちりとウイソクをする。

「のっぽの女でやんす」

悪びれもなく湯田はにやにやとしながら言い放つ。さつと胸ぐらを掴むヤシヤ。若干、体が浮いているのは気のせいだと思いたい。

「あたしはのっぽの女やない。スレンダーな美女や。そこんところ間違えんなや！」

殺気を放ちながらヤシヤは湯田を睨み付ける。その様子を笑いながら春香は見ている。

「さ、行くで。あいつを追いかけんねんやろ、ぼやぼやしている暇はないで」

ヤシヤは湯田を放すと、踵を返して歩き始めた。

「どつだ」

「ヤシヤという女にやられました……」

ローブに身を包み眼鏡をかけた女が、男達に尋ねる。

「なるほど、七尾祐介の密偵か」

女はぼそりと何かを呟くと、男達の体が燃え上がっていく。

「ぐ、ぐああ、……さ、ま、な、ぜ……」

「あの方の創る世界にお前達はいらないうことだ」

女は冷酷に言い放つと、そこに歪んだ穴が生じた。

「ワームホール、七尾祐介の仲間を始末にかかれ」

それだけ言うと、女は歪んだ穴の中に消えてしまった。そしてぶつりと穴も消えてしまった。

汽車に乗り、七尾が向かった場所へと急ぐ。

「七尾君にあつたら、絶対一発殴つてやるんでやんす。勝手に一人で出て行つて……」

湯田はおどけて言い放つた。だけど、春香もヤシャもわかっていて。湯田が自分たちに気を遣っていることを。

だから……。ぎいっという音を立てて、不意に汽車が止まった。

「早速来たか。めんどいなあ」

ヤシャはぼやきながらも汽車の外に飛び出していく。

「湯田さん」

「わかつているでやんす」

油断無く銃を構えながら春香。と不意に汽車の周りを霧が覆い始めた。

「これは……」

「そこですね」

だんだんと銃声が響き渡る。

「邪魔者はいない。あの方のために死んで貰いましょう」

不健康そうな男が現れた。その目は妖しく光り、気持ち悪い。

「まだ、死ぬわけにはいかないんでやんすよ！」

湯田が爆弾を男に向けて放つ。

「湯田さん、後ろ！」

炸裂音が響き、汽車の外にはじき出される二人。

「げほげほ、どうして今の爆弾が避けられるんでやんすか」

「教えてあげましょうか」

銃弾が男の声と共に飛んでくる。

「それは……」

勝ち誇つたような男に不意に飛んでくるもの。どかりと男が吹き飛ばされた。

「はあはあ、御託を言ってる暇があつたら早く私たちを倒したらどうですか？」

春香の必死の形相に、びくりと男の目が動く。
そして口をおもむろに開き、そして。

「えっ……」

ずどんと後ろにあつた汽車が吹き飛んだ。

「何であんたがここにいるねん……」

ヤシヤはぎろりと中華服に身を包んだ男を睨み付けた。

「……さあ。どうしてだろうな」

男は早口で呟くと素早くヤシヤに迫る。降り出された拳を槍の柄で受け止める。びりりと手に鋭い衝撃が走る。

「わかつたわ。何であろうとあたしを邪魔するんやったら、容赦せえへんで、双さん」

槍を振りかざし、殺気を放つヤシヤに元赤龍幹部、双利一は冷たい目で睨みをきかすだけだった。

「行くで」

激しい突きを放つヤシヤを双は素早い動きで全てかわす。そして、少し出来た隙につけ込み、一気に距離を詰める。

「甘い、シュッ！」

槍は接近戦には弱い。そこをつかれた。鋭い拳法の突きにヤシヤは吹き飛ばされた。

「ぐっ、強烈やな……」

「まだ甘い、シュッ！」

起き上がるうとしたヤシヤに容赦ない追撃が襲う。さらに吹き飛ばされ、汽車の側面に叩き付けられる。

「があ」

倒れ込んだヤシヤに双が近づいてくる。

「何でや、あんた、何でここにおるねん」

「主を失った私をあの方は救いをもたらしてくださったのだ、シュ

ッ！」

双が感情を荒げる。ヤシヤは槍を放り投げ、素早く起き上がった。予想だにしない行動に一瞬双の動きが止まる。その隙に手早く掌底を打ち込み、叩きのめす。

「その、あの方つてのは何者やねん」

槍を突きつけながら、双に尋ねる。双は何も答えず、そのまま自ら命を絶った。

「えっ、何でや」

ヤシヤは驚きを隠せなかった。自分が知っている双利一とそのあり方があまりにも違ったからだ。あの方とは、それほど影響力を持つ者なのか……。少し恐ろしく思いながら、ヤシヤは歩き出そうとした。

その時、汽車が爆ぜる音がした。

春香は一步も動けなかった。突然、後ろにあった汽車が爆発したのだった。いや、違った。目の前にいる男が何かを放ったのだ。

「驚きましたか？ このワームホールの力に！」

「ワームホール？」

男は嫌らしく笑いながら、勝ち誇った。春香は銃を構えながらワームホールと名乗った男を睨み付けた。

「どうです、深海からの水を使った大砲は。汽車だろうが何だろうが木っ端微塵！」

「うっさいでやんす！」

湯田がワームホールに石を投げつける。だが、その石は当たることなく通り抜け、湯田の後頭部に当たる。

「！」

体を石をすり抜けた。いや、違う。

「まさか、空間を繋げる能力……」

「その通り、予想以上に頭が切れるようだ」

ワームホールが口を開いた。

「湯田さん、右！」

春香の声が響く。そして、水の弾丸が一直線に通り抜ける。

「ふう、危なかったで……」

間一髪かわして、一息をつこうとした湯田を更に水の弾丸が迫る。

「ゆ、湯田さん！」

まともに水の弾丸を食らって湯田は消えた、はずだった。何故かそこにはびしょ濡れになった湯田の姿があった。

「あれ、助かったでやんす……」

ぼんやりと光る胸元に湯田は気がついた。懐をこそごと漁るといつか七尾に渡された白い箱があった。

「何でやんすかね」

湯田が箱を開けるとそこには赤く脈打つ小さな腕が納められていた。

「鬼の腕……」

湯田の脳裏を一人の少女が掠める。七尾が救うことが出来なかった、たった一人の少女を。

「湯田さん、それは？」

ワームホールの水の弾丸をかわし、春香がやってくる。湯田は鬼の腕を抱えたまま、真剣な表情で告げる。

「鬼の腕でやんす」

「もしかしたらそれであいつを倒せるかも知れません」

「真剣な表情で春香は呟いた。湯田はそれに頷く。

「あの方に刃向かうものは死あるのみ」
ワームホールがまた水の弾丸を放ってくる。春香と湯田はそれをかわす。

動いたのはまず湯田だった。爆弾を辺りに放つ。炸裂する爆発音、そして春香が鬼の腕を持ってワームホールに迫る。

「えりゃああ！」

鬼の腕はワームホールをすり抜けることなく突き刺さる。傷口がえぐれ、呻き声を洩らすワームホール。

「そんな、私が、あの方の力を頂いたはずなのに……」

「霊力のあるものにその能力は効かんで」

無情な声と共に黒い槍がワームホールの体を突き抜ける。

「穢れ神の信奉者」

吐き捨てるようにヤシヤは呟いた。

第10話 決着の刻

その日は酷い嵐だった。当たれば痛いほどの雨が降り、風は家屋をも吹き飛ばすほどだった。

そんな中、一人の若者は深い山の中をふらふらとさまよっていた。体のあちこちに獣に襲われたと思しき傷があつて、意識も朦朧としていた。

やがて男はごとりと倒れた。後には、ただ雨が彼の体をざあざあと濡らしているだけだった。

男は夢を見ていた。刀と銃を持った青年が大いなる者と戦っている姿を。

やがて光が男の周りを覆い始め、二人の戦いは見えなくなってしまう、そして

「ここは……」

「お気づきになりましたか？」

男はまぶしい光に目を覚ました。暖かい布団の上に横たわっている自分に少し困惑する。

「ここは名もない小さな山村です。あなたは近くの山で倒れていたところを村の者が見つけて、助けたのです」

側で介抱していたと思われる女が穏やかに答えた。

「私はこの村の社に務めている七尾という者です。あなたは？」

「布具里珠夫。しがない冒険家です」

男はそう答えると、ぐつと笑みを浮かべた。

「ここが社か……」

七尾は社の方から出てくる嫌な雰囲気顔に顔をしかめながら、近づいていく。

一言で言うなら不快。生きとし生けるものを否定する空気が漂っているのだ。

「七尾祐介、これより先には行かさぬぞ」

不意に声がして、七尾の目の前に小柄な女が現れる。

その姿は一言で言うなら魔女。ローブに身を包み怪しげな雰囲気を漂わせている。

「魔女の末裔か？」

銃を素早く抜きながら、後ろに下がる。

「私はババヤガン。誇り高い魔女の末裔」

そついうと魔女の姿は消えた。

「姿を消す能力か……」

「そつだ」

声があちこちから聞こえる。

考えられるのは二つ。何らかの方法で声を反射させているか。

奴自身が瞬時に動いているか、そのどちらかだ。

七尾は銃をしまい、徒手空拳で攻めることにした。

「武器をしまったか。自ら死にますと言っているようなものだ」

魔女のあざ笑う声がする。それを無視して目を閉じる七尾。

「ならば死ね！」

魔女が迫ってくる。ぐさりとナイフが脇腹に突き刺さる。七尾は意にも介さずナイフの先にある腕を掴む。

「チェックメイトだ。いかに姿が見えないと言っても攻撃の瞬間はそこにある」

銃を抜き、魔女がいる場所と思しき場所に弾丸を撃ち込む。

「何故、私が攻撃するタイミングがわかった……」

絶え絶えの息、魔女が負けを認め、姿を現した。

「わずかな空気の動きだ。風はほとんどないから、神経を集中させれば、だいたいの動きはわかる」

「なるほ、ど……うつ！」

魔女が胸を押さえ、苦しみだした。七尾は動きをとれないように銃を放っただけで、致命傷は与えていないはずだった。

「ぐ、天使様……。な、何故……」

おやすみ、ババヤガン

くすりと女とも子供ともとれる声が響き渡った。ぐたりとしたまま、魔女は目を閉じ、息を引き取った。

「何なんだ……」

私は。何なのでしょう。あなた方の概念の中で一番近いのは天使でしょうか

呟いた七尾の声に反応してか、声は続ける。

はじめまして、七尾祐介。あの女の子

男の絶叫と共に社がどかりと吹き飛び、中から大きな怪物が現れた。上半身はいわゆる人型の天使だが、下半身は胴体の長い魚だった。

「穢れ神か」

それは愚かな人間の考えです。私はこの世界を何度も作り直す。そのため存在

「今を生きている人達の命を、生活を奪うつもりか！」

いかしても結局は滅ぶでしょう。神を冒瀆し、同族を一掃するパンドラの箱を開ける。

穢れ神と呼ばれた天使は両手を開き、掲げた。

歴史は繰り返す

雷光が響き、天使の両手には三つ又の槍が収まっていた。

「くっ、どうする！」

一瞬の逡巡、ふと目にした天使は少し動きを止めていた。

これは、あの女の、巫女達の結界。少々やっかいなもの……

七尾はすぐに動いた。一目散に天使とは反対の方向に逃げ出す。

どこまで行っても変わりません。まずはこの国の古き京を滅ぼします

「く、まずい。どうする……」

ここで逃げて、どうやってあんな奴と戦えばいいのか、それがわからない。ただ、ここにいるだけでは意味がないのだ。

「戦わないと、だが……」

「師匠！」

七尾は自分を呼ぶ声に振り向いた。そこには見慣れた、それでいて心が落ち着く面影が何個もあった。

「あれが穢れ神やな。けつたいな奴や」

ヤシヤが黒い槍を構えながら呟いた。

「でも、姿だけで動けてないでやんすよ？」

「結界か何かが発動してるんや、でもそんなに長く持ちそうにないわ」

じたばたと暴れる天使を一瞥しながら、ヤシヤは湯田の言葉に答えた。

「で、どれくらい持つ？」

「専門家や無いけど、短くて半日、持って一日やな」

「そうか……」

七尾は歩きながら、下を向き、考え出す。

「湯田君、集められるだけの仲間を琵琶湖畔に集めてくれ。そこで戦うしかない」

「わかったでやんす」

「やるしかないですね」

湯田に続き、春香も頷き、七尾は鋭い切っ先を振り抜き、天使に向かって突きつけた。

琵琶湖畔に向かう汽車に乗り込み、七尾は手紙を取り出した。

「これは？」

「親父からの手紙」

その言葉に春香は少し俯いた。行方不明の七尾の父親を思い出したのだろう。

「大丈夫。もう俺は……」

笑みを浮かべ、春香に語りかける。上目遣いの春香は少しはにかんで頷いた。

そして、七尾はゆっくり語り出した。

「俺の母親は、昔、山奥にある小さな村で巫女をやってたらしい」

「おお、巫女さんでやんすか！」

「と言つても普通の巫女さんじゃない。どっちかと言つとシャーマンみたいなものだったらしい」

「呪術を使えたんですか？」

「ああ、そうらしい」

「そうらしい？」

春香が七尾の言葉にかわいく首をかしげた。

「実際、俺は見たことないからな。俺が物心つく前に母さんは死んだ」

「そうなんですか……」

まずいことを聞いてしまったと、春香が顔を下に向ける。その頭にぼんと手が置かれた。

「気にしなくて良い」

「で、続きは？」

「母さんと親父は出会ってから生まれてしばらくはその村で過ごしていた」

七尾が一呼吸を置いて、荷物から一本の刀を取り出した。古びた鞘に収められたそれは七尾が愛用していた鬼切ではなかった。

「ある日、村は謎の集団に襲われた。親父や村の人も抗戦したが、村はほとんど壊滅して、親父は俺を連れて逃げた。母さんを犠牲にして」

「えっ……」

「そうせざるを得なかったんやな」

ヤシャがぼつりと呟いた。

「それが……オイラ達を襲った」

「ああ、そうだ。奴らはあれを復活させるために活動していた」

「結局、あれに殺されてしまったみたいやけどね」

「人を呪えば穴二つ。そう言う奴らが集まって出来ていたからな、あの集団は」

七尾の言葉にヤシャも頷く。

「でもそれってだいぶ前の話でやんすよ……。何で今になってあれが復活するんでやんすか？」

「ああ、穢れ神を封印している場所は何ヶ所もあるんだ。だから封印を解くのに時間がかかったんだ」

「なるほど」

七尾の説明に納得したように湯田は頷いて、ぼんと手を叩く。

「そういうことだったんですね」

「もっと早くに言ってくれば良かったんでやんすよ。そしたら、

防げたかも知れないのに……」

「……………すまない」

「今更言っても仕方ありません。どうにかして穢れ神を倒さない」と
春香がきっぱりと言いつつ放った。その様子をヤシャは頼もしそうに、
それでいてどこか寂しげに見ていた。

嘆きの旋律が琵琶湖の澄んだ水を揺らし、響き渡った。

「いよいよだな」

七尾がヤシャに声をかけた。

「ああ、そうやな」

「今まで色んな事があったよ。湯田君と会って、借金返済を頑張っ

て、事件を追って、色々なものと戦って、それで行き着く先はどうなんだろうな」

「……あんたは凄いわ。あたしには真似できへん。信念で動いて、強くあつてな」

ヤシヤはぽんと七尾の肩に手を置く。

「死ぬ覚悟も決めてるんやろ。その刀を持ってきたって事は」

「ああ、呪われた妖刀・村正。母さんの唯一の形見だ」

刀を掲げながら答える七尾を一瞥し、ヤシヤは黒い槍を構えた。

「結局、最後は俺達だけで戦わないといけないか」

まず銃を抜く七尾。春香が後ろから爆弾を用意しているのを見て、動き出した。

愚かな人間よ。消え去るがいい

天使が動いた。巨大な体が小さくなり、人のサイズに変わる。

「ヤシヤ！」

「わかつてる！」

ヤシヤの黒い槍と天使の三つ又の槍が交錯し、火花を散らす。

その程度ですか

くすりと笑うとヤシヤをはじき飛ばし、首に三つ又の槍を突きつける。

「どけ！」

鬼切を振るい、天使をヤシヤから退かせる。

「まだですよ！」

響く銃声。天使の体を貫く。

無駄です。そんなもので私は壊せませんよ

くすりと笑う天使。その無邪気な笑みに春香は戦慄を覚えた。

「吞まれるな、春香ちゃん！」

遅いですよ

刹那、天使が動いた。春香の首を鷲づかみにし、持ち上げる。春香の体が浮いた。

「く、食らうでやんす！」

七尾が託した鬼の腕を持って突っ込む湯田。鬼の腕が天使の体に触れる。

しかし、鬼の腕は一瞬にしてぼろりと崩れ落ちた。

「そ、そんな……」

天使は湯田を一瞥すると、尾を振るった。強い衝撃を受けて、湯田の体が吹っ飛び、地面に叩き付けられた。

「次はあたしや!」

槍を鬼気迫る表情で振るうヤシヤを流れるような動きではじき飛ばし、春香を放り投げる。さらに七尾に迫り、三つ又の槍を振るう。ぎんという金属音が響く。鬼切と三つ又の槍が交錯する。

「絶対、負けない」

雄叫びと共に鬼切を払う。よろめく天使に七尾は銃を打ち据え、更に村正を引き抜き、天使を突き刺す。

これは、あの女の……

「消える!」

振り抜こうとしたとき、刀の柄を、七尾の手を誰かが掴んだ。

「あんたは死んだあかん!」

七尾を引き離し、黒い槍を天使に渾身の力で突き刺した。声にならない声が響き、絶叫が地を揺らした。

消える、消える、き、え、る………

黒い血を吹き出し天使が崩れ落ち、消えた。

「や、やったのか……」

七尾が顔を上げて、起き上がった。だが、その顔は悲しみに満ちていた。

「ヤシヤ、しつかりしろ!」

倒れたままのヤシヤに駆け寄る。全身から血が流れ、胸には深く貫かれたような跡が残っていた。

「し、師匠、これは……」

春香が七尾を見つめる。七尾はおもむろに口を開いた。

「妖刀・村正。斬りつければ斬りつけるほど、使用者を傷つける……」

…」

「え、まさかヤシャさんは知ってて師匠の身代わりに……」
春香の言葉に七尾は首を縦に振った。

「そない、暗くならんといてや。今までのことを考えれば当然の報いや」

息絶え絶えなのに、ヤシャはにと笑って呟いた。その笑顔が痛々しくて春香は直視することが出来なかった。

「それに今、七尾君は死んだらあかん」

ぼんやりとした口調でヤシャは呟いた。七尾はゆっくりと首を横に振った。

「それでもあんたは必要やねん。七尾君、今までありがとな」

七尾の方を向き、小さく頷く。

「春香ちゃん、七尾君を助けてやりや」

「メガネ、あたしはのっぽの女やなくてスレンダーな美女や。覚えとき」

春香や湯田に向けても、一言呟くとヤシャはゆっくりと目を閉じた。

「や、ヤシャさーん！」

春香の絶叫が空を揺らした。

あれから半年経った。七尾は今も以前と変わらず冒険家で探偵をしている。

「師匠、行きましょう」

「待ってよ、春香ちゃん。早いつて……」

春香に催促される七尾を見て、湯田は微笑んだ。

「さて、オイラも行くでやんす」

七尾達の後を追いかけて、湯田も歩き出す。

「もう半年か……」

七尾がぼつりと呟いた。下を向く七尾にぽんと春香が肩を叩いた。
「大丈夫ですか？」

「ああ、ちよつと感傷に浸ってたただけだ」

七尾はそれだけ言うつと蒼く済んだ空を見上げた。

悲しみもある。苦しみもある。それでも七尾は生きていく。あの
日、天使と戦った時と同じように。

「さ、行くか。冒険に！」

「はい！」

「もちろんでやんす」

七尾は空を一瞥すると、歩き出した。七尾の冒険はまだまだ続く。
生きている限り。

完

第10話 決着の刻（後書き）

これで完結です。今までお読みいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0789h/>

大正冒険奇譚 異伝

2010年10月8日14時45分発行